

平成17年度地域連携支援ソフト事業

近畿の街道を活かした“交流拠点”ネットワーク推進事業

～ウォーキング・IT・歴史文化～

報告書

平成18年3月

国土交通省国土計画局

目次

1. 近畿の街道を活かした交流拠点ネットワークづくり	1
1-1. 近畿の現状	2
1-2. 近畿の街道資源について	2
1-3. 街道資源を活かし地域を活性化する取り組み	3
2. 具体的な取組み	5
2-1. 街道交流シンポジウムの開催	6
2-1-1 開催の目的	6
2-1-2 プログラム	6
2-1-3 プロフィール	7
2-1-4 基調講演	9
2-1-5 活動報告会	16
2-1-6 パネルディスカッション	26
2-2. イベントにおけるマップの活用	48
2-2-1 街道マップ作成をおとしたネットワークづくり	48
2-2-2 竹内街道マップ作成をおとしたネットワークづくり	48
2-2-3 熊野街道マップ作成をおとしたネットワークづくり	50
2-2-4 京街道マップ作成をおとしたネットワークづくり	52
2-2-5 西国街道マップ作成をおとしたネットワークづくり	54
2-3. ウォークイベントの演出	57
2-3-1 道標の図柄の制作	57
2-3-2 提灯の図柄の制作	57
2-3-3 “ケータイ・街道ナビゲーション”の実施	59
2-3-4 “QRコードシールの作成”の実施	60
2-4. これからの取組み	61

1. 近畿の街道を活かした 交流拠点ネットワークづくり

1-1 近畿の現状

近畿においては、経済の低迷が続いていたが、最近では経済指標にも明るい兆しが現れ、期待の持てるプロジェクトも進行している。また、歴史や伝統をとおした地域おこしに取り組む地域もあり、これを大きく育てていくことが必要である。日本社会全体の発展のためにも、歴史・文化・技術が高度に集積した近畿の持つ役割は大きく、近畿の発展は欠かせないものである。

全国総合開発計画「21世紀の国土のグランドデザイン」においては、「参加と連携」による国土づくり、地域連携を推進するために、連携意識を高めるとともに、地域間の連携が円滑に図られることが重要であるとされている。しかしながら、近畿の各地域においては、集客効果を有する交流拠点の形成を推進しているものの、各府県、自治体、関係協議会の観光振興施策や、民間団体などの活動は個別の取り組みに留まっていることが多く、圏域内の交流拠点や観光資源のポテンシャルが十分に発揮されているとはいえない。

このような状況を発展的に解消し“交流拠点ネットワークづくり”を推進するために、近畿の各地域が連携し、様々な取り組みをおこなう必要がある。

1-2 近畿の街道資源について

近畿地方の大阪府、京都府、兵庫県、奈良県、和歌山県、滋賀県の6府県には、古来より交通要衝であった拠点と、それを結び域内全体をまたいで京街道、熊野街道をはじめとした複数の街道が存在している。また、近畿が我が国最大の歴史や文化の集積地であることから、歴史文化資産をはじめとした数多くの観光資源を有しており、各地域においては、これまでも、これら地域資源を活かして観光集客力を高め地域の活性化が図られてきたところである。

近畿全体の連携を図るテーマとして、「街道」はまさにふさわしいテーマといえる。

1-3 街道資源を活かし地域を活性化する取り組み

平成16年夏の「紀伊山地の霊場と参詣道^{さんけいみち}」の世界遺産登録は、そのインパクトを地元のみならず近畿全域まで波及させている。世界遺産へ指定された地域にも熊野街道をはじめ、古くからの街道がある。各地で地域おこしが進み、地域連携への機運が高まりつつある。この流れを一つのチャンスとし「街道を活かした交流ネットワークづくり」を推進する。

その具体策としてまず、自治体、NPO、ウォーク愛好家等などで構成した官民協働「近畿街道・交流拠点ネットワーク推進会議」を発足させた。関係府県等の連携のもと、関係市町村、地域住民、NPOや市民団体、鉄道会社、歴史街道推進協議会、関係企業などそれぞれの取り組みを有機的に連携し、多様な主体の幅広い参加と協働による地域連携・交流の促進を図った。

この推進会議を核として「地域と地域を結ぶ街道を実際に歩く街道ウォークイベントの実施」に取り組んだ。歩くことを通して、街道が地域と地域を結ぶものであることを感じる事ができる。歩くほどに変わっていく道、まち並み、人・・・そしてそれらは街道という一本の道でつながっている。この街道ウォークイベントをとおして近畿の地域の連携をアピールしていった。

さらに「ウォークイベント」を盛り上げるため、NPOやウォーク愛好家等との協働による街道案内マップの作成、官民協働による道しるべ等の道案内の充実、携帯電話のQRコードを活用したルート案内や歩行記録等の街道歩きサポートシステムを実施した。

そしてこれらの活動を集約する形で『街道が結ぶ近畿の交流拠点』をテーマとしたシンポジウムを開催。圏域内の交流拠点形成を一層促進、集客効果の拡大を図り、より魅力的で個性的な活力ある誇りの持てる自立的な地域づくりを展開し、“元気な近畿圏づくり”を広く発信していった。

2. 具体的な取組み

2-1 街道交流シンポジウムの開催

2-1-1 開催の目的

大阪府、京都府、奈良県、和歌山県、兵庫県、滋賀県、福井県の7府県に跨る近畿圏には、古来より交通要衝であった拠点とそれを結び域内全体を跨いで歴史と文化に彩られた複数の街道が存在しています。

近畿の街道を活かした“交流拠点”ネットワーク推進事業では、これらの地域資源を活かして、関係府県、市町村、地域住民、NPOや市民団体、鉄道会社、関係評議会などのそれぞれの取り組みを有機的に連携し、実施してきました。本シンポジウムでは、これまでの取り組みの成果を広く発信することにより、“元気な近畿圏づくり”を考えていきます。

2-1-2 プログラム

14:00～14:05	開会挨拶	国土交通省国土計画局参事官	大木 健一
14:05～14:50	基調講演	街道が結ぶ文化と交流 作家	神坂 次郎
15:00～15:40	活動報告会	枚方宿地区まちづくり協議会 NPO法人ゴダイ NPO法人下津DHCクラブ NPO法人たかとり観光ボランティアガイドの会 NPO法人阪神南夢マップづくり NPO法人歴史の道東海道宿駅会議	
15:50～17:20	パネルディスカッション	街道から始まるまちづくり ・コーディネーター 歴史街道推進協議会事務局長	井戸 智樹
		・パネリスト NPO法人なら燈花会の会前会長、観光カリスマ	朝廣 佳子
		枚方宿地区まちづくり協議会事務局長	岸上 隆昭
		本宮町語り部の会会長、観光カリスマ	坂本 勲生
		社団法人日本ウオーキング協会副会長 全国街道交流会 代表幹事	村山 友宏
17:30	閉会挨拶	大阪府 土木部長	丸岡 耕平

2-1-3 プロフィール

神坂 次郎（こうさかじろう） 《作家》



昭和2年、和歌山市生まれ。『元禄御豊奉行の日記』（中公新書・中公文庫）がロングセラーとなり、文化庁の文化功労（芸術部門）文部大臣賞を受賞。『縛られた巨人 南方熊楠の生涯』（新潮社・新潮文庫）によって、熊楠ブームの火付け役となる。現在も和歌山市内に在住。平成13年に文化庁長官表彰、平成14年に「南方熊楠賞」特別賞を受賞、平成15年6月に「長谷川伸賞」を受賞。

井戸 智樹（いどともき） 《歴史街道推進協議会事務局長》



1959年姫路市生まれ。早稲田大学、松下政経塾卒。85年「高橋亀吉賞」受賞。91年発足の歴史街道推進協議会では、歴史街道モデル整備（50地区）、TV番組放映（3000回）、日本文化を海外PRするフォーラム活動（50都市）等に取組んでいる。

朝廣 佳子（あさひろ よしこ） 《「なら燈花会の会」元会長・観光加双》



1960年 岡山県生まれ。93年（株）読売奈良ライフ代表取締役兼編集長。99年（社）奈良青年会議所第40代理事長を勤め、「なら燈花会」の実行委員長としてイベントを大成功させ、00年より「なら燈花会の会」会長に就任し、04年には、11日の開催期間中に70万人もの誘客に成功している。

岸上 隆昭（きしがみ たかあき） 《枚方宿地区まちづくり協議会事務局長》



1952年 枚方宿街道沿い岡本町商店街で生まれ。74年、関西大学商学部卒業後、商店街活動を通じてまちづくりに興味を抱く。99年より枚方宿まちづくり勉強会に参加、00年6月枚方宿地区まちづくり協議会同事務局長に就任。現在（株）ピオルネ 取締役営業部長。

坂本 勲生（さかもと いさお） 《熊野本宮語り部の会会長・観光加双》



1928年和歌山県本宮町生まれ。和歌山県教員となり、88年和歌山県本宮町立三里中学校長を最後に退職。89年本宮町史編纂室長に就任。本宮町文化財保護委員会委員に就任し、紀州語り部の会に入会。93年本宮町文化財保護委員会委員長、98年本宮町語り部の会（熊野本宮語り部の会）会長。

村山 友宏（むらやま ともひろ）

《日本ウォーキング協会副会長、歩く観光振興アドバイザー》



1940年兵庫県生れ、福崎高校、早大政経学部卒業、東工大社会工学科研究生修了。万国博調査機構研究員を経て、74～96年、浜野研究所、北山創造研究所に入り街づくり支援活動に従事。現在（社）日本ウォーキング協会副会長、全国街道交流会議副代表理事。美しい日本の歩きたくなるみち推進会議事務局長、遊歩都市研究所主宰。「歩く道の駅」構想や「街道遺産」の選定を提唱中。

開会挨拶



国土計画局参事官 大木 健一

【司会】 皆様、本日はお忙しい中「むすぶ道、であう道 - 街道交流シンポジウム」にいただきまして、誠にありがとうございます。

私、司会進行役を務めさせていただきます嶋道まどかと申します。最後までどうぞよろしくお願いたします。 それでは、ただいまより「むすぶ道、であう道 - 街道交流シンポジウム」を開催いたします。

それでは、開会に当たり当講演会の主催者を代表いたしまして、国土交通省国土計画局参事官、大木健一より開会のあいさつを申し上げます。

【大木】 国土交通省国土計画局参事官の大木と申します。

本日は街道交流シンポジウムを開催いたしましたところ、このように多数の皆様にご来場いただき、誠にありがとうございます。主催者である近畿街道・交流拠点ネットワーク推進会議と国土交通省国土計画局を代表いたしまして、一言ごあいさつ申し上げます。

まず初めに、私ども国土計画局の仕事を一言で申しますと、これからの日本の国土をどのような姿にしていくのがよいかを考え、その実現に向けて都市や産業、交通などの各分野を総合した計画を立てること、いわば日本の未来の設計図を描くことと言えます。現在、この設計図となっているのが21世紀の国土のグランドデザインと呼ばれる計画でございます。この計画は、参加と連携による地域づくりを重視しておりまして、個性的で魅力的な地域づくりを実現するためには、行政のみならず地域住民やボランティア団体、民間企業などの多様な主体による地域づくりを展開していくことや、既存の行政単位の枠を超えた広域的な連携による取り組みが重要であるとしております。

このような参加と連携による国土づくり、地域づくりを効果的に推進するため、国土交通省におきましては地域連携支援ソフト事業という事業を展開しております。近畿の街道を生かした“交流拠点”ネットワーク推進事業は、この参加と連携による地域づくりの先進事例、代表事例であることから、本日のシンポジウムを国土交通省が支援し、共同で開催することとなりました。

さて、大阪府をはじめといたしまして、この近畿圏は、言うまでもなく我が国の中心として長い歴史を有する地域であり、数多くの国宝や重要文化財、貴重な観光資源を有しております。ま

た、平成16年7月には熊野古道や高野山、吉野山などが紀伊山地の霊場と参詣道としてユネスコ世界遺産に登録され、国内外から多くの観光客を集めております。一方、折からの健康ブームとも相まって、各地でウォーキングを楽しむ方々が増えており、竹内街道や熊野街道などにおいては鉄道会社などが主催するハイキングやイベントが多数実施されております。

このたび、大阪府をはじめとする地元の自治体から、歴史的価値の高い街道を生かしつつ各地の交流拠点の観光集客効果を高めることによって、近畿の活性化を図ることが極めて重要であるとの提案がなされました。今回の取組で欠かせないのは、地元の自治体や民間企業はもちろん、みずからの手でまちづくりや歴史文化の保全などに取り組んでおられる住民や団体の方々との幅広い連携と協働であったと聞いております。

こうした多くの方々のご参加、ご協力をいただきながら、街道沿いで開催されるウォークイベントにあわせて、府県をまたいだ街道案内マップづくりや、街道歩きをサポートする、携帯電話を活用した街道ナビゲーションの実施など、地域の連携・交流に資する活動に取り組んでまいりました。

これらの取組に引き続きまして、本日、街道が結ぶ近畿の交流拠点をテーマとしたこのシンポ

ジウムにおいて、皆様と共に街道を生かした地域の活性化について考え、元気な近畿圏づくりへの取組として広く全国に情報発信してまいりたいと存じます。

さて、冒頭に、21世紀の国土のグランドデザインのことを申し上げましたけれども、実は、その次の新しい計画づくりが既にスタートしております。昨年7月には、昭和37年以来グランドデザインに至るまで、過去5回にわたって策定されてまいりました全国総合開発計画の根拠法でありました国土総合開発法を抜本的に改正し、新たに国土形成計画法という法律に基づく国土形成計画を策定することとなりました。

この改正のポイントは2つございます。1つには、これまでの開発中心のものから成熟社会型の計画へ転換したこと。もう1つは、国土形成計画を全国計画と広域地方計画の2本立てにより構成したことでございます。今後、全国計画につきましては来年、平成19年の中ごろを目途に、また、広域地方計画につきましては、その1年後を目途に策定することを予定しております。新しい時代の新しい国土計画に関しましては、国土交通省国土計画局のホームページにおいても公開しております。

最後になりましたが、本日の基調講演をいただきます神坂次郎先生をはじめ、パネルディスカッションなどにご登壇の方々には大変お忙しい中、出演のご快諾を賜り、この場をかり厚く御礼申し上げます。また、本日のシンポジウムの開催に当たりまして格別のご協力をいただきました関係の方々には深く感謝の意を表します。

また、国土交通省といたしましても、この街道を生かした“交流拠点”ネットワーク推進の活動が今後の近畿圏の活性化の一翼を担うものとして、さらに発展するようにお祈り申し上げます。

それでは、会場の皆様におかれましては、どうぞ最後までゆっくりとこのシンポジウムをお楽しみください。

以上、開会のあいさつとさせていただきます。どうもありがとうございました。

2-1-4 基調講演

『街道が結ぶ文化と交流』

作家 神坂 次郎



【司会】ただいまより作家、神坂次郎先生の基調講演を始めさせていただきます。

神坂先生は和歌山に生まれ、和歌山に住み続けながら文壇の第一線で活躍され、『縛られた巨人 南方熊楠の生涯』や『熊野まんだら街道』など、和歌山の歴史、文化に関する作品を数多く発表される一方、近畿における地域の活性化と発展、及び文化の交流のために数多くの講演会を行われるなど、精力的な活動を続けておられます。

【神坂】 神坂次郎でございます。

「街道が結ぶ文化と交流」、そういうテーマを与えられましたので、私の思っていることをお話し申し上げたいと思います。

街道ということは、やっぱり1里何丁とか、それがすぐに、徳川時代の文献には出てきますが、1里というのは36丁と私は小学生のころ教えられたんですが、時代小説その他を書き始めると、1里が36丁と、先生あんなことを言ったけど、先生全く知らなかったのかなと思うことがいっぱいあるわけなんです。というのは、東海道とか、そういう重立ったところは1里36丁。だけど、各文献を調べてみると違うわけですね。山陽道へ行きますと、1里72丁、倍ほどあるんです。佐渡へ行くと1里が50丁、伊勢街道は1里が48丁なんです。このように違うわけなんです。極端に違うというのは、和歌山から熊野もうでをする、これは1里36丁なんです。その帰りに、本宮から那智へ歩いてくると、1里が50丁なんです。

私なんかの仕事で一番困るのは、旅日記なんかを読む場合です。「そこから1里行きました」、36丁の場合もあるし、70丁の場合もある。ある有名なお坊さんの記録を読みますと、あそこ

らあたりはすごく人が悪いと。もう1里歩いたら、何とか、かんとか。もう2里歩いたらという話を聞いた。だけど、歩けど歩けど、向こうが見えてこない、だまされたと。お坊さんが悪いのでも、教えた人が悪いのでもないんです。例えば、1里70丁なんかの場合は、やはり旅日記を読むときに、それを頭の中でももう一度反芻し直して書かないと、今の読者にわかってもらえない、そういうところがあります。昔の道路の里程というのはいろいろあるわけなんです。

どうしても旅、街道、道ということになってきますが、旅を代表するのが大名行列なんです。東海道を下ってくる大名もある、中山道を下ってくる大名もある、甲州街道もある。五街道というのがありますね。家康のころになってから五街道を決めたわけなんです、主要な街道。外国人のケンベルなんかでも、随分褒めておりますね。日本の道というのはすごく清潔であると。周りに杉並木があったり、掃除が行き届いていたりしている。

その大名行列なんです、大名というと、すぐ「下にいる」なんていう言葉が時代映画なんかでもよく聞きます。「下にいる、下にいる」と言うので、我々人民は平伏するわけなんです、「下にいる」というのは、3回言うと将軍家なんです。2回言うと御連枝なんです。普通の大名は1回です。「下にいる」だけしか言えないんですね。ですから、こういうところも、今までのお芝居や映画なんかでも、ちょっと違うんじゃないかなと思います。

加賀百万石の大名の行列というのは、以前はNHKの歴史の何とかという、松平さんがやっている番組でしゃべったことがあるんですが、これが一番大勢だと思います。大体3,000人。江戸へ行って帰ってくる、7億円かかるわけです。江戸で使い果たすお金が藩の収入の7割くらい使っているんです。ときの領民はかなわんですね、その残りで生活せんといかん。だから、江戸というのはそれくらいお金がかかる、外交の場なんですよ。ですけど、そういうところを見ると、すごくおもしろい。

徳川の決めでは四百何十人ですね、加賀藩の大名は。だけど、それにいっぱい人がくっついてくる。例えば、武者1騎、馬乗の身分が1騎というと、家来は10人ぐらいついてくるわけです。それが、もう何十人となると、膨大な数になる。だから、少ないときで二千何百人、これは加賀藩の記録に書いてあります。ですから、そういうところに旅行をする。その当時の人が見聞を広めるといのは街道を通じた道なんです。山側に住む大名は中山道を通る、甲州街道を通る、海側では東海道を通る。

中山道というと、昔、有名な放送会社の女のアナウンサーが中山道というのを読み違えて、「一日中やまみち」と読んで大笑いになったことがあります、うまく読んだなと思って、私はそれに感心したんですが、ものの読み方にも、こういういろいろな楽しみ方がある。「一日中やまみち」と、実際にはそうなんですよ。一日中、山道を歩くんですよ。この人はほんとうに洞察眼にすぐれているなと思って、そのアナウンサーが出てくるたびに私は感心するんですが。(笑)

だから、幾つにも分かれた道、それを歩いていく。旅というのは、自分の常識が常識として通らない場所へ行くわけなんです。だから、すごい発見がある。方言なんて全く通じない。宿場役人というのがありますが、大名は宿場にほとんどのお金を落とすんですね。これも70%くらい落としたんじゃないかなと思います、そういう記録が加賀藩の記録にもあります。だから、宿場がものすごく栄えるわけです。その宿場、宿場にお金を落とす。加賀藩なんかは3,000人というぐらいの人数が行きますと、その宿場を抜けるのに、一番先頭が歩いてから6時間かかるんです。6時間、その宿場は通行どめなんです。あかすの踏切のようなものですね。それで、行列を横切ると、よく映画なんかにあります、無礼打ちといって殺されるわけなんですよ。だから、じっと耐えているしかないということがありますが、6時間とはすごい行列なんですよ。

そういう行列が盛んに参勤交代で往来したわけです。それとともに、江戸の文化が地方に入り、地方の文化が江戸に入っていく。その文化の交流というのがすごく発達した時代なんです。だから、封建時代という一概に、カビの生えた何とかと悪く言う人がありますが、そういう面を見ると、すごい文化の交流というのが感じられるんですね。

例えば、私は『元禄御豊奉行の日記』というのを書きましたが、そのときちょっと調べたところによると、尾張のほうの庄屋さんが江戸へ出ていったと。普通、庶民の宿というのは相部屋が多いんですよ。個人部屋なんていう、今のようないいところはないんですが、そういう庄屋さんでも相部屋なんです。そこへよそからの人が、また相部屋になってきたと。そうすると、今年、尾張はものすごく凶作であったと。聞いてみると、東北の庄屋さんはものすごく豊作であったと

言う。それを聞いて、お互いに交換しようというので、米相場ができたという話があります。お互いに、持ちつ持たれつ交換すればいいと。旅というのは、やっぱり、そういうところの見聞があるわけですね。

ですから、私は、昔の封建時代というのを一概に悪くは思わないんです。そのころの法規制にしても、見て見ぬふりというのがあるんです。お役人でも、見て見ぬふりをしてくれる。例えば、元禄のすぐ後に、ものすごい緊縮財政があって、昔の一番いいときに買った着物を着ていきたい、だけど、それを着ると摘発される。そんなときに、若い娘さんが晴れ着を着て、今は禁令になっているけど、やっぱり女の子ですから、そういうのを着たい。それで通っていると、風紀係のお役人が横丁へすっと逸れていったというんです。見て見ぬふりをするという、そういうよさというのがあるわけなんです。

例えば、関所というのがありますが、関所は明け六つに門が開く、暮れ六つに門が閉じるんですが、そんなときに例えば、だんな衆の母親が急病である、どうしても越えていかないかと。真ん中に関所がある、そこへ来るともう日の暮れになってきたと。暮れ六つを過ぎると、1泊せんといかん、また時間が遅うなるというときに、乗っているだんなが金をちやりんとほうるわけなんです、すごく大きな金を。そうしたら、そんなかごですから、2人で担いでいるんですよ。急ぎのかごですから、6丁立てとか何とかいう、何人かが周りについている。その垂をべりっとへき破る、足の速い1人がその垂を担いで、かごのように担いでさーっと走っていく。関所の門というのは一遍には閉めない、太鼓をたたくわけですね、どーんと。それが聞えてくると、ああ、もう閉まる、閉まると知らせるわけです。それがどーん、どーんと、だんだん間近くなってくる。近くなってきたときに、びたっと閉まる、そういう決めがある。だから、それまでに、足の早いかごかきの1人がぱっと走って、関所の門が閉まるドアの中に股を張って、自分が1人で担いでいるような声で「よいっさ、よいっさ」と言うわけです。それで、下からずっと上がってくる。ようやく、これにくっつけて「よいっさ」と言うので、ざーっと行ってしまおうと。そうしたら、今までのまどろになっていたものが、どん、どん、と急になって閉まっていくと。そういう目こぼしがあるんですね。

例えば大井川なんかの川どめがあって、渡る。庶民には大変なんですよ、そのお金が。だから、あそこは無料で行けるのはお相撲さんが芸人、川原で芸をするんですよ。例えば、お相撲さんなんかは相撲甚句を歌ったり、初切なんかをやったりすると無料で渡してくれるんですよ。芸人は三味線を弾いたり歌を歌ったりすると渡してくれるんです。だけど、何も無い、貧乏な人にとって一番安いのは、棒がずっとありまして、前と後ろを川越え人足が担いでいるんですが、その真ん中に、イワシの目刺しのようにぶら下がっていくことなんです。ずっと自分で歩いてついていくんですが、そのお金もない人がある。そういう人たちに暖かいんですね、川越えの役所の人の目は。目こぼし渡しというのがある、はるか下流になったら、自由に行ってくださいと、そのかわり流れても知りませんよということはあるんですがね。だから、急いでいる人、金の無い人、それは目こぼし渡しの、外れたところを渡すと、そういう法律があります。それが封建時代です。やはり、いいところが随分あるんですね。悪いところばかりに目をつけるので、いいところに目をつけると、そういう時代というのが身近になってくるし、生きている人の表情が浮かび上がってくる。

かごかき人足なんかがありますが、宿場で面倒見がわりにいいわけなので、どうしてもお金が欲しいというときに、息杖、これは竹の棒ですね。それを質屋へ入れる、そういう人足専門の質屋がある。そこで、随分高い値段、今でいうと20万円ぐらい貸してくれるんですね。それを質屋に預ける、ただ約束があるんですね。預けた以上は、かごをかいて苦しくてほかの棒きりでつえにするわけにいかないんです。甚だしいのは、息杖もなかった場合に、ふんどしを入れるんですよ。ふんどしでも20万円ぐらい貸してくれるんですけど、引き出すまではふんどしなしで、すっぽんぽんで走らんといかんと、そういう決めがあった。そういう決めというのは案外大きく書かれておらないんですね。



ですから、やっぱりいろんな人の仕事、侍といってもいろいろありますから、そういう人たち

の生態を私は書こうと思ひまして、『風呂桶を担ぐ侍』という短編小説を書いたんです。これは、殿様の入るふるおけを担いでくる。参勤交代というのは、泊まる宿は本陣、陣を置いた一番主要なところという意味なんです。戦争に行くんです。戦闘態勢なんです、参勤交代の行列というのは、だから本陣と言うんです。本陣ですから、屋根のあるところを借りる、ただ、ほかは何も借りないんです。ですから、たくわん石とか桶もそのまま江戸まで持って行く、ふるおけも殿様専用のものを使う。本陣のふるおけは使わないんですね。ですから、何人かで組んでふるおけを持って行く、そういう侍の生涯を書いたことがあります。

そのほかにも、おまるを持って行く。これは戦国時代ですが、武将のおまるを持っていったと。岡山のほうの私の知り合いの家がそうなんです、おまるを持っていったとえらい自慢をしまして、そのおまるはあるのかと言ったら、いや、いや、そんなものはもうどこかへたたく割ってしもうたとか言っていますが、それが残っていればすごい値段やぞと言ったことがあるんですが、お宝鑑定団なんかをやりますと、すごい値段がつくんじゃいかなと言っていたんですね。

また、見てきたように友達が話すんですが、中は朱を塗っている、外は黒い、定紋がついていると。ランドセルのように背負うようなひもがついていて、殿様の一番の側近であると自慢していましたが、殿様の近くまで行けるのはうちの家系ぐらいやと何か言っていました、それはそうですね、殿様の大事なところを見るんですからね。(笑)それで、おそば衆が「これよ」とか言ったら、ささっと行って、おまるのふたをあけて、見ては失礼ですから背中を向けて、こうやって、作法をやってくれましたが、ただ、音でわかりますから、終わったのが。(笑)それで、またふたを置いて、またついていくと。戦国時代の出雲のほうの大名の家なんです、おまるを担ぐ侍。だから、そういうのが綿々と続いているわけです。侍といっても、いっぱいあるわけですね。

それと、江戸の近くの川越の侍のことを書いたことがあります。本を揺すぶる役。図書館の司書みたいなものですね。本というのは和紙でつくっていますから、虫が食うわけです。川越藩というのは、いい本がものすごく多いんです。ですから、本に虫を食わすといかんと、それを揺すぶるんですね。その揺すぶりに方に秘伝があると言うんですね、いろいろと。名前なんか、すごくいいんですよ、須磨のあざ波とかね、その揺すり方ってどうするのか知りませんが。その侍が二百何十年間、徳川時代、その家の親から子、子から孫、ひ孫、ずっと本を揺すぶっていたわけですね。(笑)

そういう家が川越にありまして、それで本を書いたことがあります、すごくおもしろいですよね。薄暗い大きな書庫の中に2人で座ると言うんですね。1人というのは、徳川時代はあまりやりませんから、全部2人でやる。そんなときに、立ったりするのは禁止されているんですね。立って、爪でもはがしたら薬代がかかると言っ、じっと座っているわけです、一日中。月に何回か、その本を交替で揺すぶるわけです。本はたくさんありますから、慌てて揺すぶると閉じ目に入ってくるというんですね。そうしたら、殿様に対しては不忠の臣になるからというのがあったり、それが二百何十年続いた。その侍も家へ帰ったら、やっぱり偉そうな顔をするに違いないんですが、ずっと暗いところで本を揺すっていると。きつく揺すると、和紙ですから、ぺろっとなるんで、それが名人の手にかかると、ぴーんと鉄板のようになるというんですね。そういうのを一遍見たいなと思ひますが、まだそういう名人には出会っておりません。

それとか、河内の丹南藩、この近くですが、魚の寸法をはかる侍。(笑)その所在が丹南藩、1万石なんです、あるときに出陣をしたと。自分の攻めたところの城主の首を、トンボを引きちぎるようにとったと。それを祝って、4寸何ぼの けちってますよね、4寸幾らというのは、河内ですからしょうがないですが、そのタイを食べるのがお祝いの行事なんです。殿様だけがタイを食べるんです。そのタイが4寸何分と決められていますから、それよりも大きくても、小さくてもいかんわけですよ。だから、それをはかる役がある。寸打ち役、寸法をはかるんですね。何か、絹の袋か何かに入れて、毎日出仕しているんですが、そんなものは年に一遍しかないわけですね、殿様のいわゆる創業記念日みたいな日ですね。そのときに、それをはかって、よろしゅうござると言うたら、殿様のところに行く。焼き上げて4寸幾らですから、難しいんですね。それより、こんな何をしたいかんといいので、その男がはかったときに、ちょっと小さかったんで、こう引っ張ったら、尾っぽが抜けてしまったという、そういう侍の悲しさですね。(笑)これ、どうしようかって、くっつけたくても、くっつかないとか言っ、そういう騒動が起こった藩の話を書いたことがあります。ですから、侍といっても一色ではないんです。

二百何十年の徳川時代の間には、いろんな侍がいた。だから、ふるおけを担ぐ侍なんていうのは、私が好きな侍なんです。そのほかに畳1枚分の鉄板を参勤交代の道中について持って行く侍があると。それを浅黄の袋に入れて、戦前まではあったらしいんですが、それがもうなくなっておったというので、どうして、そんな鉄板を持っていくのやというたら、殿様が床の下から突き殺されない、暗殺されないための鉄板であると。それを長持ちに入れて持って行くという家系もあります。

ですから、そういうものを調べる気になって調べると、侍といっても、刀を2本差して威張っているというんじゃないんですね。随分つらい侍、我々の現代とそんなに変わらない、役所へ行くといろんな人がおりますよね。『元禄御畳奉行の日記』なんていうのを書いたんですが、それは現代でいうと、営繕係の係長か課長です。その生態をずっと書いたことがあります。でも、今の人が読んでわからないと困るんですね、その悲しさが。だから、歴史を見ると、そういう人たちがずっと起き上がってくるような気がする。そういうものを書くべきじゃないのかなと思って一生懸命に書いてはおりますが。

聞いた話があるんですが、ある小さな島に1人の中年の男がおりまして、江戸を見たくてしようがない、何とかして江戸を見たいと。随分わらじが要るので、毎日わらじを編んで、山ほどつくったんです。それを担いで1人、とどここ行く。関所へ行くと通してくれない。じっと座って、最後にはぼろぼろ涙をこぼして泣く。悪い男でもなさそうやし、もう、うるさいから行けと、各関所で行け、行けというので、ずっと情けにすがって、よそでご飯を食べさせてもらったりして、最後に箱根の峠に差ししかかったんです。大きな池がある、それを見てびっくりした。その男はずっと歩いて行って、浅草の観音様へ来た。観音様の番人にすごく気に入られて、自分がこれだけわらじを担いできたというのを感じられて、観音様の6尺ぐらいの大きなわらじがありますね、その片一方をもらって、担いで帰ってきたという変わった男なんです。ようやく自分の島まで帰ってきて、今まで見てきたことを話した。箱根の上には差し渡し1里もあるような大きな池があったと。それ以来、村の人はだれも相手にしてくれない、大ぼら吹きや、うそつきやと。そういう話があります。

それと似た話が、司馬遼太郎先生のところにもある。竹内街道ですね。あそこで、中学生のころに、みんなと話をした。戦前ですから、あまり外へ出ていったりはしないんです。司馬さんが、海っていうものはね、向こうが見えないぐらい大きいんだらうと、みんなを集めて話をした。何かのときに海辺のほうに旅行したことがあったらしいんですが、それ以来、司馬さんはぼら吹きというあだ名になったというんです。彼らが知っているのは、自分の土地の竹内街道の、あのため池みたいな池しか知らん。そんな海があるはずがないと、戦前というのはそんな時代だったんですね。それで、司馬さんがエッセーにも書いていますし、私は直接お伺いしたこともあります。ですから、知らないところを見るというのは大変なことなんですね。

例えば、私がつくづく思うことなんです。太平洋戦争以前に、今のように観光業者が発達して、みんなが海外へ旅行する、そういうことがあったら、あの戦争は起こっておらないと思うんです。みんながアメリカを見てきて、どこそこを見てきて、日本と比べて、比較ですから旅というのは、そういうのを見てくると、そういう戦争が起こっておらなかつたらうと、それをしみじみ感じます。やはり旅、そして道。道の大きさというのとはかり知れないものがある。道には、そこらじゅうに先人の足跡がある。

例えば、芭蕉なんかは「私は女足ですから、1日に10里ぐらいしか歩けない」と言う。冗談じゃない、10里歩けるとすごいもんですね。我々も1日ぐらいは10里歩けますが、2日目になったら1里も歩けないですね、腰が抜けてしましまして。だけど、昔の人はそれぐらい歩いている。大名行列というのは、そういう壮なる歩く集団の大イベントなんです。ですから、7億円ぐらい使って、それをやっていく。もともと400人でよかったのが、だんだん増えてくる、それは他国へ綺羅を飾るわけなんです。加賀百万石というのはこんなものですよという、大きさを表示する、しかも制約はされいながら徳川家にもそれをわからせる、そういうものがある。だから、参勤交代に行った人たちがいろんな文化を持



ってきている。江戸の絵草紙が東北の片田舎にあったり、東北の片田舎の何とかが江戸にあったり、そういうことをしている、交流しているんです。

一番私なんかは感心するのは、宿場役人ですね。すごい金を落とすわけなんですよ。しょっちゅう参勤交代ですから、二百何十騎の大名が往来しているんですから、往来するたびに金を落とす。だから宿場産業がものすごく発達したんです。その中に、各地方の方言がわかるような、今でいうたら外大出身のような、そういう手代や番頭がいっぱいあったということです。九州便で「け、け、け」という言葉がありますが、そんなことを言われてもわかるような耳を持った手代、番頭さんがいっぱいあったということなんです。言葉というのは文化ですから、それだけ全国の文化が広がっていったということですね。

ですから、日本列島が道を通じて1つになって、いろんな技術とか歴史とか文化とか、何かがみんな広がっていった。それが道の歴史を考える上のすごい大きなものだ。徳川時代の二百何十年の間に、すごくそれが発達した。紀州藩の侍にもありますが、江戸に滞在しておったときのものを比較する日記が残っております。紀州ではこうだ、江戸ではこうだというのを比較する、比較する目を持つというのはすばらしいことですね。ですから、そういう大名の行列から始まって、1人旅。1人旅というのはほとんどの人はできなかった。だけど、五街道が整備されてから、旅行文学というのが発達してきたんですね。伊勢へ参る、みんなでどこそこへ参る、そういう旅行文学が発達して、『東海道五十三次』みたいなのがいっぱい出てきたんです。ここへ行けば、こんなにおもしろいというようなことがあった。

だから、封建時代といいながら、それがきっかけなんですよ。今の前哨戦になるべきものが、もうそのころから既に出てきた。戦争中はそれが途切れましたが、これからそういうことがますます発達して、視野が広がって、自分の育った常識が通用しないという、相手を許す規範ができるわけなんですよ。そうなったら、戦争というものも、ちょっと起こりにくくなるんじゃないかなとは思いますが。

旅行して、一番困るのはお金なんですよ。道中、お金をどう持っていか。1両が4貫ですから、10両持って歩けないですよ。それをどうしたか、そういうのを考えるのも旅の楽しさになってくると思うんですが。伊勢参りなんていうのも、大阪でもお伊勢講というのがありまして、自分で金を持っていかずとも、毎月長屋で10文とか5文とか掛け金をして、それが全部たまったら行きましようというので、先達がわーっと行く、全国からそういう人が集まってくるというんです。

対馬から集まってきた人なんかは、伊勢に着いたとき、ものすごく騒がしかったらしいですね。なべかま全部たたいて、じゃんじゃん上へ上がってきたんです。でも、大阪の女の人にはかなわないですね、すごい化粧をして、もう真っ白に塗って、内ももまで見えるようにおしろいを塗って、高げたを履いて、赤い腰のものをちらちら見せて、わいわい言う。大阪の男の人とか女の人が来ると、1里向こうからわかったという、やかましいんですね。わいわい言って、何か自分が天下をとったような、今と変わらないでしょうが。(笑)そういうお伊勢参りがある。

大阪に伊勢講というのが多いんですね。伊勢というのはだれでも参れたんですね。豊受大神、農民の神ですよ、下宮のほうは食糧の神です。だから、それを理由にすると、あのうるさい最中でも旅行ができたんです。まして、講中、団体で行くことができたわけなんですよ。ですから、そういうのがお伊勢参りの一番の特徴だと思います。それと、成人式ができる。若者が先輩に連れられて、または村のお年寄りに連れられて行く。そこで、下市とか何とか、華やかな女の人たちがおるところがある。そこで通過儀式が終わる、おまえ、そこへ行けとか何とか言って、それで一人前の男になって帰ってくるという、それがお伊勢参りの楽しさの1つでもあるんです。

へんばもちという、もちを売っていた家のおばあさんの書き残したものに、そういうことをよく頼まれた。そこのおばあさんの家は、東北あたりの人を受け入れる宿だったらいいんですが、うちの息子をやりますから、お金をこれこれ持たせましたから、いい女の人に会わせてくださいと、くれぐれもいい女の人に会わせてくださいと。それを念を通して頼みにくると、私は随分世話をしたというんです。うちの番頭さんがちょうちんを持って、夕方そういう店へ送っていくと、翌日になったら、すっきりしたような顔つきでぼんぼんが帰ってくると。そして、朝ごはんを食べていると、そこへ続いて向こうの下男か下女がラブレターを持ってくる。巻紙に、上が紅で染めて桃色になっている、恋文なんですよ。ゆうべはすごく楽しかった、何とか何とか。それをもらったらしめたものですよ、村へ帰っても、男になったわけですから。ですから、そういう

通過儀式というのも傍らにあったということが、へんばもちのおばあさんの語り残したものにあります。

ですから、旅というのはいろんな人たちがいろんなものに触れる機会、かわいい子には旅をさせよと。旅をさせよというのは、楽をさせるためにやるんじゃないんですよ。旅というのはこんなに怖いですよ、外へ出ると追いはぎがあって、人殺しがいて、そこへ1人ほうり出すというのは大変なことであるというのが含まれてはおるんですが、そういう旅というのが家康が五街道をつくったあたりから、随分少なくなっただけなんです。護摩の灰というのがありますが、いわゆる詐欺師みたいな、ペテン師みたいなものですが、それはもともと高野山の奥の院で護摩をたいた、その灰を持ってきた、それをお分けしようと言って、どこかのかまどの下から持ってきたような灰を高い値段で売りつけるのが街道において、それが護摩の灰なんです。だけど、そういうのが広がって、詐欺師みたいなのがいっぱい出てくる。

旅では知らない人と友だちになるな、酒を飲んだらいかん、宿に入ったら、一番先に逃げ出す場所を覚えておくと、そういう教えが徳川の中期以降ぐらいには『旅行用心集』という本が出ております。そういうことが克明に書いてあって、これは今と全く同じなんです。ですから、持っていく物はできるだけ少なくしよと。芭蕉なんかができるだけ少なく、少なくと歩いて、きょう1日行ったらくたくたになってしまった、荷物もそんなにないの、くたくたになったというのは、『奥の細道』を読まれた人はご存じだと思いますが、それにも書いてあります。旅というのは、そんなに疲れるものであって、そんなに怖いものであって、ですから旅がおもしろいんですよ。だから、庶民はみんな講中、みんなが掛金をして、金を持たずに、どこへでも行ける、そういう旅が徳川の中期以降から発達してきたわけです。

伊勢なんかでも、御師の家ですね、そういう人たちの親分ですが、その家になったら1,000人ぐらい泊めるだけの大きな屋敷があったというんです。だから、そこでわーっと団体が入ってくる、大阪から500人とかが入ってくる。そうしたら、台所ではじゃんじゃん料理をせんといかん。米なんか炊いている間がないんですよ。熱湯の中へばーっとほうり込んで蒸すわけなんですね。魚なんかも、やっぱり熱湯へほうり込むんです。そうやって流れ作業をやっていくわけなんです。焼け火ばしを持って焼けこげをつくる者があるわけなんですね。(笑)いかにも焼き魚のような感じでぎーっとやっていくと。だから、今とほとんど変わりないです。今もそういうところへ行くと、大体そんなものですが、徳川時代からも、そうやって焼け火ばしを持っていた人の職業があったのかなと思うと愉快になってくるんですよ。だから、焼いている暇なんて到底ないわけで、そういう人がしょっちゅう来る。

伊勢参向の話をお前の、近畿ツーリストですか、旅行者の人に頼まれて話をしたら、うらやましいなと言って、それだけ人口が大移動するということは考えられんことやと。徳川時代は、やっぱりお伊勢参りと、熊野もそうですね。田辺の宿場にもものすごい人数が1週間の間に集まったことがあるんです。そんなこと、今でもちょっと考えられないと。もっとも、この前は3,000人ほどの団体が熊野へやってきまして、やはり世界遺産のおかげなんじゃないか。

私の知っているじいさんが語り部なんですよ。明日3,000人ほど来ますからというので、興奮して、晩に寝ずに暗記するわけですね、間違わないようにしゃべれるかと。ばあさんに励まされて行ったんですね。それで、立っている道祖の前をずっと通るんですが、そこで立ちどまってくれないんですよ。旗を持った人が、進め、進め、とまったらいかん、時間がないんやと。(笑)そのおじさんが空振りに終わってがっかりしている後で私が行ったことがあるんですが、ゆうべ一晩覚えたのに、前をすーっと通って行っただけと、がっかりして。

お伊勢参りも大体そういうことがあったと思うんですが、だから東北へ行きますと、例えば関西では大峯山へ参ってくると一人前になったとか、若者がよく行ったことがあります。東北へ行きますと、伊勢参りは済ましたとか、熊野もうでを済ませたというのが一人前の印なんです。若衆やろうで座る位置が全部違ってきますよ、そういう通過儀式が終わったのと終わらないのと。ですから、昔から、旅というものが人生の通過儀式の中で重きを置かれておったということがわかるんです。

こういう旅をきっかけにして調べていきますと、お金なんかでも全部違うんですよ。100文が98文でしか通らない地域もある、お金の段階が違う。だから、ご褒美で小判をもらうというのは上級の侍なんです。中級の侍になったら銀なんです。下っ端になったら銭なんです。だから、お百姓が何かをもらったといったら銭何貫文、銭なんですよ。小判をもらったという記録はない

わけです。あれば、その記録はちょっとややこしいんです。だから、身分によっても違う。吉原へ行って、一番すごい人に対するお礼は小判なんですね。中級になると銀になる、一番安い、我々クラスの相手になると銭なんですね。だから銭で済む、銀で済む。そして、葉なんかは銀なんですね。ですから、その金がややこしいんです。名古屋は金銀両方通じますが、関西は銀目立て、60目が1両なんです。

だから金といっても、例えば、ちょっと気が迷ってよろめきを起こしたと、そのときにおわびに7両と言いますよね、あれは高野山に納める首代です。ほんとうは10両だったんです。10両盗めば首が飛ぶとあって、大体10両だったんですが、だんだん相場が下がってきて7両になったと。だから、大阪の男がよろめきを起こしても、大阪はそんなに金離れがよくないですから、そういう金の払いは5両なんですね。さわり300、300匁ですね、大阪でも違う。だから、土地によって金の使い方、金に対する意識がちがってくる。ですから、そういうものがわからないと、旅行記なんかを読んだ場合に、もうちんぷんかんぷんになってしまうんですね。それがわかると、すごくおもしろい、どういうお金の使い方をしたかと。

大阪なんかでも愉快な人がいて、東北を一周回ってきて、あまり売れない芸人なんです、田舎へ行くとわかりませんから大きな名前を使って、それでずっと回ってきた男の日記があります。よくもまあ、こんな日記を書いたものだなと思ったんですが、すごくもてたり、夜ばいに行つて天井から落ちて、腰の骨を打ったりなんか書いてありますが、すごくおもしろい人がいます。だから、徳川時代の旅行記というのでも、いろんな人種、いろんな人たちが、いろんなものを書いている、あるいは語り残している。そういうものを見ると、歴史の幅がもっと広がってくるんじゃないのかなと思います。 ~終了~

2-1-5 活動報告会

【司会】

ただいまより、街道や交流拠点周辺におけるまちづくり活動を実践するさまざまな団体による、活動報告会を開催いたします。

まず初めに、本シンポジウムの大きなテーマでもある、近畿の歴史街道や街道の振興に関する取り組みをご紹介いたしまして、その後、6団体の皆様方にご登壇いただき、その団体の活動報告を行っていただきます。

それでは、まず初めに、近畿の歴史街道や街道の振興に関する取り組みにつきましてご報告をさせていただきます。

私たちの暮らす近畿圏は古代、飛鳥、奈良、平安時代から、朝廷や都が置かれるなど、我が国の歴史の源流とも言える地域であり、各時代を通じてさまざまな文化が育まれてきた土地でもあります。

このような長い歴史の中で、近畿圏においては地域と地域を結ぶ街道が発達し、人や物の流れ、暮らしを支えるとともに、歴史や文化を今に伝えてきました。例えば、大阪府の堺市と奈良県の葛城市を結び、古くは『日本書紀』にも登場する竹内街道、遣隋使や古代中国からの使者などが往来した古代大陸との外交の道であり、シルクロードの東の終着点を担った我が国で最も古い国道と言われています。

次に、熊野街道をご紹介します。皆様もご存じのとおり、2004年7月に、紀伊山地の霊場と参詣道^{さんけいみち}がユネスコの世界遺産に登録されました。熊野古道ではたくさんの観光客が訪れ、厳しい自然の中で受け継がれてきた信仰の道のたたずまいを楽しんでおられます。この熊野への道、いわゆる熊野もうでのための陸路が、今の大阪天満橋に当たる渡辺の津、八軒家から一路和歌山の熊野方面に続いていたことは意外に知られていないのではないのでしょうか。

京阪本線天満橋駅の南側には、熊野街道の起点を示す石碑や、八軒家船着き場跡の石碑が設けられています。また、現在新しい鉄道である中之島新線の工事が急ピッチで進んでおり、大川には水の都大阪の再生に向けて現代の船着き場が整備される予定です。



次に、東海道へ続く京街道です。こちら大阪の八軒家から京都方面へ続く街道ですが、途中、守口、枚方、淀、伏見の4つの宿があり、くらわんか舟、三十石船など、淀川などの舟運と深いかわりを持つ街道です。

最後に、江戸時代、参勤交代の行列が行き交う道であった西国街道をご紹介します。遠くは九州方面からの山陽道を経て、現在の神戸三宮から大阪、箕面、茨木、高槻などを通過し京都へ至る道のりです。道中には茨木の郡山宿本陣などがあり、当時の面影を伝えています。

さて、ここで街道の振興にかかわる自治体や民間組織の取り組みをご紹介します。本日のシンポジウムの実行組織でもある近畿街道・交流ネットワーク推進会議は、近畿の2府5県、3つの政令指定都市、国土交通省、歴史街道推進協議会などの各種協議会、そして関西の私鉄各社が連携して設立した組織です。

この推進会議では、街道の振興・交流の促進に向けて、さまざまな取り組みを進めてまいりました。まず、鉄道会社などが主催する街道ウォーキングイベントなどに合わせて、本日皆様のお手元にもお届けいたしました「街道案内マップ」を作成・配布し、また、ウォーキングコースの中継ポイントでは、地元の方々のお力をかりてPRイベントを開催いたしました。

さらに、携帯電話のバーコード読み取り機能を活用して、街道の案内、ナビゲーションシステムを試行しました。街道の道中に設けた道しるべにバーコードを張りつけ、これを読み取れば現在位置や周辺観光情報、歩行距離、さらには消費カロリーなどが画面にあらわれる仕組みです。

このほか、大阪府では歴史街道の案内を充実するため、地域の企業や組織、団体から寄贈をいただくなど、さまざまな形で街道の道しるべを増やしています。

では、続きまして、近畿各地の街道におきまして目覚ましい活動をされている6つの団体の活動内容につきまして、発表を行っていただきたいと思います。

まず初めに、京街道を代表して、枚方宿地区まちづくり協議会の皆さん、どうぞステージにお越しく下さい。

枚方宿地区まちづくり協議会（代表 平澤 英正）

本日は京街道の代表ということで、最初に少し京街道の説明をさせていただきます。

東海道はお江戸日本橋から京都までの53次とよく言われますが、実は、京街道を含めて、大阪までの57次がほんとうなのです。慶長20年（1615年）の大阪夏の陣の後、幕府は東海道を大阪まで延長し、京街道には伏見、淀、枚方、守口の4宿を設けました。幕府の公文書にも、東海道は品川宿より守口宿までであるといった記述も見え、江戸を起点とする五街道を支配する道中奉行の直轄であったことは確かなようです。

枚方宿は京都と大阪の中間に位置し、東海道56番目の宿場町として本陣も置かれ、東西約1.5キロの街道沿いには400軒もの旅籠やお茶屋などが軒を並べ、交通の要衝として栄えました。また、北河内の特産物も枚方宿に集まり、物資輸送の大動脈であった淀川の水運を利用し、全国に発送されておりました。

現在の枚方宿地区の概要ですが、この枚方宿にはまだ数十軒の町屋が残存しており、旧東海道の面影を今もしのぶことができます。また、枚方宿は枚方市の中心市街地に位置しており、近くには枚方パークの遊園地や淀川の枚方水辺公園があり、休日には現在の健康ブームの関係ですが、リュックサックを背負って街道を歩いておられる方々をよく見かけます。

現在、我々が活動している枚方宿地区まちづくり協議会につきましては、平成11年の初め、市役所から枚方宿地区について歴史的景観をつくりながら、ともにまちづくり活動をしていかないと自治会や商店街の代表者に説明と打診がありました。まちづくり協議会を立ち上げるために、平成11年9月、まちづくり研究会を発足させ、立命館大学の高田先生の指導により、まちづくりの勉強会を始めました。

まず、地区内の全戸を対象にした住民意識調査アンケートを実施して、住民の皆さんの意向を聞きました。また、全住民に呼びかけて、まちづくり懇話会も開催しました。主な意見としては、



町屋などの歴史的な建造物がなくなってきたのに、まちづくりを始めるのは遅過ぎないか、街道を通過する自動車をどうするのかなど、さまざまな意見がありました。いずれにしても地道な努力が必要で、そのためにまちづくりを行っていくことを説明し、理解を得ました。こうした経験を経て、平成12年6月に現在のまちづくり協議会を設立し、現在6年目の活動に入っております。

主な活動としては、春のコンテナガーデンの植えかえに始まり、秋には街道菊花祭を実施するなど、花と緑の街道づくりに取り組んでいます。特に、街道菊花祭では、市内の小中学校で育てられた大菊20鉢を街道沿いに並べるとともに、まちににぎわいをつくり出そうと、地区内のお寺や公園などを会場に枚方ジャズストリートを開催し、まちの歴史や文化を広く発信しています。

このような活動が評価され、花の観光地づくり大賞や地域づくり表彰を受けることができました。これらを励みに、住民みんなが自分たちのまちに愛着と誇りを持ち、活動の輪を広げていきたいと考えております。 ~ 終了 ~

NPO法人ゴダイ（代表 石井 聖美）

【司会】続きまして、竹内街道を代表して、NPO法人ゴダイの皆さん、どうぞステージにお越しく下さい。

【石井】特定非営利活動法人ゴダイ理事長をやっております石井聖美と申します。後ろにいますのが、ゴダイで、この竹内街道を中心に活動をしているメンバーです。

きょう、皆さん、こういう袋をお持ちですね。この中の資料、ごらんいただいていますでしょうか。このグリーンの中に、今発表しているメンバーの紹介などが載っています。もちろんゴダイも載っています。NPO法人ゴダイという形で載せていただいています。

もう一つ、マップが3つあると思います。このマップの中で、竹内街道、これですね。こちらのほうの中を開いていただきますと、堺から奈良まで、竹内街道の図が載っています。地図があるんですが、この地図の協力をさせていただいたのがNPO法人ゴダイです。

街道というのは、NPO活動をするときに、すごく取り組みやすい題材なんですね。ただ、その中で今回のシンポジウム、名前を地図に載せていただいた名誉は私たちゴダイだけだったようです。非常にありがたく思っています。表紙のところにもNPOゴダイというふうに載せていただいています。ちょっと自慢です。（笑）

中にこのような冊子が入っていると思います。こちらの冊子、これもつくりましたのは私たちNPO法人ゴダイなんですね。中のほう、何か市民がつくっているだけじゃなくて、開いていただきますと、各地方、竹内街道の通っている市町村の教育委員会の方であるとか、それからまた、参加者の方の意見なども載っていますので、これを読んでいただくと、私がしゃべるよりもよく理解していただけるんじゃないかなと思います。

私たちは生き生き長寿社会というのを実現するための活動の1つとして、竹内街道を取り上げています。この竹内街道を歩く体の元気と、それと、いろんな話を聞きながら歴史的なものを学ぶ頭の元気を兼ね備えた、元気なお年寄りがたくさん増えればいいなと思って活動をやっているわけなんですね。

きょうは2月ですが、今度3月に、また歩きます。表のほうにも少しチラシを置いていましたが、またお帰りのときに、ご希望の方にはチラシをお渡ししたいと考えています。今度3月19日の日曜日です。竹内街道の一番の難所、竹内峠を通る、歩こう会といいますか、歴史ウォークを考えていますので、参加費を1,000円ちょうだいしているんですが、払った分だけ実感があるウォークになるとと思いますので、ぜひ皆さん、きょうを機会に竹内街道にも目を向けて、一緒に歩いていただくと嬉しいなと思います。よろしく願いいたします。

~ 終了 ~



下津DHCクラブ(代表 瀬川 禎彦)

【司会】続きまして、熊野街道を代表して、下津DHCクラブの皆さん、どうぞステージにお越しください。

【瀬川】こんにちは。DHCが一番、お茶の間のコマーシャルで人気を博しております。お聞きになったことございますか。でも、こちらのほうは女性のお顔をきれいにするDHC、会社でございます。私のほうは女性のお顔でなしに、まちの顔、すなわち道をきれいにし、まちの活性化を図っておりますDHCクラブでございます。町おこしのために、夢と希望を持って挑戦しようということで、ドリーム・ホープ・チャレンジということでDHCになっております。

国道のほうは国土交通省さんのボランティアプログラム・サポートのご支援を受け、四季の花を植えかえ、訪れる皆さんに楽しんでいただけるような花づくりを数力所でさせていただいております。また、道と川はまちの動脈であり、川につきましても国土交通省さんのご支援をいただき、生き物共生事業ということで、川を魚の住むような川にしたいということで活動しております。そして、まちの人とともに、ごみ減量委員会というのを立ち上げまして、川に対する意識を啓蒙させていただいております。

また、先ほど来、熊野古道というお話も出ておるわけなんです、大阪から熊野に向けて南北に通ずる熊野古道は、私のまちの山間部にあります。先人が残したこういうすばらしい世界遺産を今後どのように守り、次世代へお送りするかというのが我々の使命ではなからうかということで、熊野古道を通していろんなイベントも展開してまいりました。

一番大きく成果を上げましたのは、海南市と下津町とを結ぶ熊野古道のご縁で、このたび昨年4月1日に海南市と下津町が合併し、人口6万の新海南市が誕生いたしました。まさしく、道を通じての文化、人の交流であり、大きな成果の1つではなからうかと思っております。

そして、昨年はその熊野古道を利用いたしまして、わくわくハイクというのを計画し、町外から1,500人ぐらいご参加いただきました。そして、町の文化、それに物産展等も開催し、訪れた方々にご紹介をさせていただいております。

私たちが、まちの顔は道というふうにとらまえて活動できるのも、ただいま着せていただいているこのジャンパーなんです、国土交通省さんが主催いたします「みちぶしん」というミュージカルがありまして、それのお手伝いさせていただきました。その中で道の歴史、また道の尊さを勉強させていただきました。今後は、このスタッフジャンパーを通してまちづくりに貢献してまいりたいと思っております。 ~終了~



たかとり観光ボランティアガイドの会 (代表 吉田 浩司)

【司会】続きまして、奈良県高取町からお越しのたかとり観光ボランティアガイドの会のみなさん、どうぞステージにお越しください。

【吉田】私は高取観光ボランティアガイドの会の吉田と申します。よろしくお願ひします。

高取町ってどこですかと、奈良県内の人にも聞かれてしまうような場所なのでございますが、位置的にはちょうど明日香の南側といえますが、そんな位置になります。大和平野の最南端という形で、藤原京時代の一番南の南山に当たる場所でございます。

私たちは平成15年8月に、高取町の歴史や文化、史跡などのガイドを通じて町の観光振興に寄与することを目的に設立された団体です。会員は25名で、幅広い年齢層の、個性豊かなメンバーで活動しております。一応、私が33歳で最年少ということになっております。



高取町の名所旧跡をめぐる6つのモデルコースを中心に、私たちの言葉で皆様をご案内させていただきます。その中で最も依頼の多いエリアが、私たちが抱える日本一の山城である高取城と、その城下町という形になる土佐街道ということでございます。

土佐という名前がついておりますが、この地は古代大和、飛鳥王権時代に古墳や飛鳥京の建設のために使役として土佐の国から駆り出され、帰郷かなわずこの地に住みついた人々が土佐と名づけたというふうに言われています。同じように、町内には薩摩とか吉備とかいわれる地名も残っております。

この町屋が並ぶ土佐街道は現在人通りもまばらで、当時の姿は見る影もありませんけれども、江戸時代には行き交う人々であふれて、街道の両脇には商店がひしめき合っていたそうです。明治以降も薬の町として、薬草の栽培や製薬に従事する人、それから全国各地へ大和売薬を販売して回る人で大いににぎわっていました。

私たちはこの歴史と文化の香る土佐街道ににぎわいを取り戻すため、また多くの方々にお伝えしていくために、主に4つの活動に取り組んでいます。

まず第1に、私どもが企画しておりますハイキングイベント、高取探検隊というのを開催しています。こちらは近鉄さんとかにもいろいろとご協力をいただいておりますけれども、土佐街道や高取城などを中心に、我々ガイドのお話を聞きながら名所旧跡をめぐるイベントでございます。企画、運営、地図の作成などを自分らで手づくりをしてやっております、毎回異なるコースをテーマに従ってご案内させていただきます。

先月の1月22日に終わってしまいましたので、次回は5月21日にさせていただく予定ですので、また皆様よろしければ、ホームページや近鉄のハイキング情報誌などのご案内しておりますので、ぜひお越しいただければありがたいと思っております。

第2に、土佐街道をはじめとした名所旧跡案内や、高取探検隊などのイベントの情報を発信するために、インターネットを積極的に利用しております。また、高取観光メールマガジンというのを月に1回程度配信しております、これをきっかけに訪れてくださる方も大勢いらっしゃるようになってきました。

それから第3に、最近新聞でもちょこっと載ったりしたんですけれども、高取城の当時の姿をコンピューターグラフィックスで再現すべく、奈良産業大学の学生さんに協力をいただきまして、今年の8月末ぐらいを完成目標に、高取城をコンピューターグラフィックスを使ってCG再現をするということもさせていただいております。

最後に、今年の4月ぐらいから、土佐町並み天の川計画というのを実行いたします。この計画は、土佐街道を天の川、それから各種店舗や露店などを天の川のお星様というふうに見立てまして、星をいっぱいつくって、お店を露天みたいな形でたくさん、住民の方々と一緒にお店を開いて、にぎわいを取り戻すための計画です。月に1回ぐらいのペースでにぎわい市とか、歴史文化教室とか、体験教室などのイベントを開催していく計画です。

そんなことで、いろんな4つほどの活動を私どもは行わせていただいております。来年もこのような場で、これらの活動がご報告できるように一生懸命頑張らせていただきたいと思います。ぜひ、皆さん高取町へお越しください。我々観光ガイドがご案内させていただきます。
~終了~

阪神南夢マップづくり(代表 福嶋 忠嗣)

【司会】 ありがとうございます。

それでは続きまして、山陽道・西国街道を代表して、阪神南夢マップづくりの皆さん、どうぞステージにお越しください。

阪神南地域ビジョン委員会の、阪神夢マップづくりグループの代表をしております福嶋です。このグループは兵庫県が主催しております阪神南県民局というところが推進母体でございます、地域活動をしている方がそこに集まりまして、いわゆる地域づくり、まちづくりをいかにすべきかという議論の後に、こういうふうな街道マップみたいな形で夢マップを



つくろうということになりました。

ご存じのように、阪神南というのは行政区画でいいますと、芦屋、西宮、尼崎、私は芦屋出身なもので芦屋を一番最初に言わせていただきますけども、そういう3つの行政区域で、各地域で活動している方も、いい意味か悪い意味か、やっぱりその行政区域にどうしてもとられて、我がまちのことは知っているけどお隣のまちは知らない。県で広域な行政をしようということで、阪神の地区みたいなところに行政の1つのサービス拠点ができましたので、何か全体をつなぐイメージなり、何かをつくらないといけないんじゃないかということになりまして、そうしますと、やはり横につながるのであれば街道だろうということになりまして、よくご存じのように、きょうもお話がありましたように、いわゆる西国街道は京都から神戸まで、そして私たちは新山陽街道と言っておりますのは、大阪から神戸、それからずっと瀬戸内海側を九州のほうに行っておりますが、地元の尼崎の人は中国街道と言っておられるんですけども、それを新西国街道、新山陽街道と認めていまして、それは一応現在の道路でいえば、いわゆる新西国街道は171号線から2号線、そして新山陽街道は国道43号線と一応念頭に置いて、それを見てみよう。

今までは国道ですが、その脇に旧国道という形の県道または市町村道があります。それがある種、歴史をひもといております。その2つ、国道、県道の間をいろいろな街道が歴史的には動きながらも、現在はある種整備された道路になっているという歴史があります。それを調査して、一応私たちは徒歩で歩きまして、このビジョン委員会は2期、4年間にわたりまして隔週土曜日、雨天には行きませんが、それなりの天気であれば午後、約85日間かけて4年間で踏破しました。踏破しましたのがこういう形の絵図で、ホールには西国街道の尼崎の分だけ張っています。ですから、約半畳分です。これを全部にしますと、約畳7畳のものになります。これは、とてもこの会場には張れないからと言われまして、県の方から最低限のところをお願いということで、今回それをご紹介します。

どんな調査をしたかと言いますと、今までの歴史系の方の街道調査というのは街道だけ、いわゆる歴史を伝ってルートをたどるといふ形なんですけど、それじゃまちづくりにならない。そして、旧国道と国道をあわせた広域なところを、ハウジングメーカーなんかで使っています住宅地図というのがございますが、その1枚分をもって1日として、1枚分をすべての人が一般的に歩ける公共空間 私の住宅なんかには入れませんが、それ以外のところはすべて網羅して歩くと、そういう形で調査をしております。

そうしますと、きょうはその冊子をお持ちしているんですけども、こういう形の、絵図になるまでの冊子です。これが西宮の分、そしてこれが尼崎、そして芦屋ですね。その中で、いわゆる街道名称というのは、今までのお話にありましたように、いわゆる石碑とか道標とか、そういうのがございます。そのほかの視点をもう少しつくらないかんのじゃないか。そうしたら、現在、市町村レベルで行われている歩道の整備、それから国道の整備も当然ありますから、それも全部網羅して入れていこうと。その中に地域のお地藏さんとか、個人の方の持っている祠みたいなものを全部網羅します。そして、それをリストアップして、総体的な1つの絵図にしております。これを私は名づけて、平成阪神間絵巻と言っていますが、ごろごろと並ぶ、そういうものです。それを全体的に見ていきますと、その地域、地域の特質なり、何らかの形で自分の住んでいるところにアイデンティティーが見えてくるだろうということで、それをもとにして地域活動のベーシックな資料にさせていただこうと。そういうことで、その絵図を抱えて各地域づくりの団体のところに行って、いろんなお話をしたりとか、その絵図の中にどんどん新しい情報を組み込むような形にしております。

そうしているうちに、この43号線という国道に、震災後いわゆる環境防災緑地というのを国がおつくりになったんですけども、この緑地は本来、単なる緑地ですよね。これは環境防災ということがついているんですけど、ほんとうの意味の環境防災になっていないんじゃないかということで、はたと思ひまして、芦屋の一番小さな緑地を、震災後、山手の洋館からレスキューしました大谷石製のリュウズノとスイコウを中心に据えて、そこに泉をつくったんです。そして、その周りの花壇は御影石のけんち石、それも全部捨てられようとする廃材をもう1回再活用して、そこに地域の植栽をいかに植えるかということで考えております。

いわゆる食べる植栽、菜っ葉類としてツルナ、これは本来この地域の海岸沿いにあった植栽ですが、これを復活させようということにしております。大きな木ではメタセコイヤという木があ

ります。これは街道調査の中で新しく見つけたんですが、武庫川女子大というのが鳴尾にあります。そこに、三木茂さんという名誉教授、ご出身でもうお亡くなりになっているんですけども、その方が戦前にこの樹枝を、日本を中心としたいわゆる恐竜時代の植物であったということで同定されて、それが戦後焼け野原に植栽運動ということで小学校または公園など、教育機関を中心としてその普及活動をされた。その活動は、我々が今、地域活動やどうやこうや言っているルーツになるんじゃないかということで、そういうことを検証しながら、三木先生のやられたことを引き継ぐような形で、もう1回そういう環境防災緑地に植えて、ゆくゆくは例えば国道の植樹帯、中央帯にこれを植えれば、例のヨン様の「冬ソナ」のメタセコイヤの並木に匹敵するようなものが、国道というレベルで日本の列島の背骨になるんじゃないかということでご提案し、その1つの例として、この環境防災緑地に国の予算で、小さい苗ですけど、植えていただいております。

これは1年で大体人間の背丈になりますから、10年たてば、あっという間に、今の阪神高速道路の背丈を越えるような形になって、景観上問題になるようなものも植栽によって緑のバールになるということで、環境及び景観的にもいい環境になる。そうすると、この国道自体が全然違う街道になる。そうすると、この国道の街道を歩く人たちがもっと元気な形で街道を歩き、また街道を楽しむ。僕たちがつくった公園が新しい名所になる可能性があるというふうに思っております。そういうふうな1つの実験をしております。

それはエコロジカルな視点もあり、景観的な視点もあり、文化財的な視点もある。そういうのを全部入れてやっていかないと、今の市民の人たちの目をほんとうの意味で楽しませられないと。今までの整備というのは、あるマニュアルのもとに、ある木しか植えられないとか、ある予算分しか植えられないみたいな形なんですけども、こういうのを市民の目線でやれば、結局、我々は10万円前後かかったんです、この泉から何からを整備するのに。これを行政がやったら100万円近くかかると思います。だから、市民がやれば10万円です。だから、こういうふうな形で、あるものを活用し展開していくという始点をもう1回持っていて、街道を歩くだけじゃなくて、街道をつくっていく、そこに名所をつくっていく、そこにつくった無名の人たちがいたという歴史がずっと残って行って、そういう思いが街道を広げていくんじゃないかと思えます。～終了～

NPO法人歴史の道東海道宿駅会議（代表 松山 正巳）

【司会】 ありがとうございます。

福嶋忠告嗣様にご紹介をお願いいたしました。

続きまして、東海道を代表いたしまして、NPO法人歴史の道東海道宿駅会議の皆さん、どうぞステージにお越しく下さい。

私どもはNPO歴史の道東海道宿駅会議と申します。よろしくお願ひ申し上げます。

本部に該当します拠点の場所は、滋賀県の東の外れ。東海道は昔の土山宿、今の甲賀市土山というところがございます。鈴鹿峠を境にしまして、伊勢と近江に分かれるわけでございますけれども、私どもは伊勢から近江へ入りました京都側の一番初めの宿場に該当いたします。



さて、東海道ということでございますけれども、先ほど枚方宿の皆さん方が東海道は53か57かということをおっしゃいました。私どもも、初めは東海道は53だと思っておったんですが、これは『東海道膝栗毛』の話やら、すごろくの話で、「きょうしが上がる」ということになっておりますから、ともすれば東海道は53だと思っておったんですが、勉強しているうちに、東海道は大阪の高麗橋までである。そして宿駅は東京は品川が1番で始まりまして、守口宿が57番目の宿場であるということがわかってまいりました。

その守口宿が57番目であるということの書類は、元和7年（1621年）12月19日に、幕僚であります、いわゆる徳川幕府の閣僚だと思っておりますけれども、シラスマタベ工、カワイセイスケという方から、守口村の庄屋並びに百姓中に出されております。どのように書いてあるかと

言いますと、「伝馬並びに次飛脚、日夜油断なく公儀相務め申すにつき、諸役御免なされ候、なお、もって庄屋、百姓中、油断存じましく候」と、このような難しい文章が出ております。この文書は守口宿に出ておるわけですが、東海道の宿駅制度に関する一番初めの立ち上がりの文書は、慶応6年(1601年)に「伝馬次のこと」という定め書きが出ておまして、これは9月15日に伊奈熊蔵忠次、彦坂小刑部元正、大久保十兵衛長安と、こういう方から出ておるのが東海道の宿駅の話でございます。ですから、私どもは今は東海道は57次であるという認識をさせてもらっております。

本日、時間が限られておりますので、皆様方、お手元の活動報告会の資料集の11ページ、12ページにまたお目通しをいただいたらありがたいと思いますが、私たちの団体は、東海道の街道の歴史を大 切に思い、昔日の東海道に思いを馳せる人たちにより、「東海道五十三次」をはじめとする東海道の宿駅制度を学習し、可能な限りそのよきものを今の時代に保存活用するために、まずシンポジウムを中心に、まちづくりを考える若手青年たち十数名で発足をいたしました。

第1回目のシンポジウムは昭和63年、旧土山町、私どものところでございますが、土山宿で開催し、第2回目は平成元年、旧品川宿、第3回は同2年に愛知県の池鯉鮒宿、第4回目は同3年に三重県の桑名宿と回を重ねてシンポジウムを進めてまいりました。回が進みまして、途中、私どもはたくさんの宿場と仲良くすることができましたので、連絡協議会というものをつくりまして、そうして過ごしてきたわけですが、第15回は平成14年、神奈川県の大磯宿、それから16回目は15年、旧石部宿、18回目は昨年でございますけれども、守口宿で交流を進めさせてもらいまして、昔の東海道の歴史遺産の認識を深めてまいりましたのでございます。

既に、関西では、土山宿、水口宿、石部宿、守口宿の5つの宿場でこのシンポジウムを開催してまいりました。そして、今年、平成18年の秋には伊勢の旧阪下宿で開催をさせていただきます。回を重ねてまいるうちに、ちょうど東海道宿駅制度400年という年を迎えました。この年は第14回目、平成13年に静岡県袋井宿でシンポジウムをさせていただきました。東海道の文化化を願い、そして東海道ルネッサンスをご指導なされます国土交通省や静岡県さんのご尽力のお陰で、この袋井宿大会は大変盛大に行われまして、昔の街道と東海道宿駅、すなわち昔の宿場町への理解と認識の輪が広がったのでございます。

400年の記念すべき年は過ぎましても、東海道の宿駅でありました町や村は私たちとともに、今後もずっと生き続けるのでございますから、このシンポジウム、交流会はずっとこれからも続けていきたいというふうに思っております。私どもはこのシンポジウムが一過性のイベントに終わりたくはございません。そんなことになっていくのを決して望んでいるわけではございませんが、宿駅制度400年という、この1つのエポックが1つの区切りというふうな誤解をされてしまいまして、そして我々の活動がしぼんでいくのは私は非常によくないと考えましたので、14年前に発足いたしましたこの東海道シンポジウムと宿駅交流の小さな芽と、ともしびを決して消さないために、NPO法人になることに決意をいたしましたわけでございます。なぜなら、旧宿場町という肩書きを持っておる地域は歴史遺産の中に生きておりますから、ここの人々の思いやりや善意は常に結ばれていなければならないのであります。決して散逸してはならないというふうに考えております。東海道宿駅制度や伝馬制度は、相互に結ばれて成り立つものですから、互いの持つ宿場としての共通項を継承するための結束力のある団体に成長していきたいと、かように考えております。

歴史の道東海道は他の街道と同様に、長い歴史のうちに人間、情報、文化、物資の流通の基盤でありました。まさに我が国のプロードウエーであったのでございます。加わるに大切な視点は、人間の生きていくための活動があったのがこの街道であったわけでございます。街道は決して、道路や鉄道といわれる無機質なものではなかったわけでございます。

私たちが重ねるシンポジウムの中で学びつつあるもの1つに、街道における人間の生きる姿があります。現在の道路の姿に、人間の生きる姿を重ねてみますと、現在のそれは昔に比べることのできない悲しさを持っていると思っております。童謡「まりと殿様」に歌われる、あの歌でございますけれども、この街道の歌は大阪守口宿の人々から江戸品川宿の人々へとずっとつながるものを持っていると私は存じております。他にも、古い子供たちの歌に、東海道を歌った歌がございます。殿様とともに暮らした庶民の姿を生かした歌がございます。

確かに、昔は殿様に失礼してはいけないと厳しく申しつけられていたと思っておりますけれども、その歌の中には優しさというものがございました。しかし、今日の道路は車が我が物顔で走り回る恐

怖の世界であります。経済活動が大きくなりますと物資の流通も大きくなることは当然のことで、それなりの道路としての対応は必要だと考えております。しかしながら、私たちは多くの歴史遺産がある中で、街道が持つ人間性こそ今後の時代に生かされるべきだと考えております。

健やかな日々の中で街道を学びつつ、慈しみつつ、道路の恐怖を忘れて街道のたたずまいを楽しむウオーク活動ができるまちが、宿場町はもとより他の町々にもたくさん生まれてくる日を楽しみにいたして、私たちは東海道シンポジウムの交流と、この宿場の皆さん方との楽しい交流会を続けていく所存でございます。

私の生まれた家には、子供のころ、文久元年1月3日に生まれたおばあさんがおりました。このおばあさんの話を私どもは聞いて大きくなったんでございますけれども、薩摩の兵隊が牛の肉を食っておるから皆で見にいこうというふうな話もございました。また、よくおばあさんが注意をしたのですけれども、濡れた布をこのように絶対さばいてはいけない、布を干すときにはこういうしぐさは絶対いかんよというふうに言われました。これは宿場の外れにあった首切り場で人の首を切る音だというふうに教わりました。昔の人たちは厳しい生活の中に、街道で暮らしながらいろいろな大切なことを我々に残してくれたと思っております。

本日の発表会、5分という制限がございます。かような生き方をしてきた我々でございますので、とめどなくお話をさせてもらったと思っておりますけれども、このあたりで終わらせていただきたいと思っております。

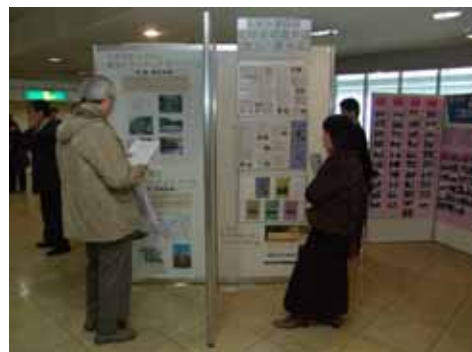
【司会】 ありがとうございます。

ステージでご報告いただきました6つの団体のほかにも、数多くの方々が近畿各地でさまざまな取り組みを展開されております。

それでは、後ほど、実際に近畿各地で街道の振興やまちづくりなどに取り組んでおられますNPOや市民団体、民間組織の方々から直接、活動のお話をいただくことにしましょう。

なお、皆様のお手元には活動報告資料集をお届けいたしておりますので、どうぞご参考になさってください。

また、当会場を出られまして後ろ側にあります受付付近にて、街道や交流拠点周辺に関するまちづくり活動を紹介するパネル展を開催いたしております。ぜひ、ごらんくださいませ。



パネル展示会場

2-1-6 パネルディスカッション

・コーディネーター

歴史街道推進協議会事務局長 井戸智樹

・パネリスト

NPO法人なら燈花会の会前会長、観光カリスマ 朝廣佳子

枚方宿地区まちづくり協議会事務局長 岸上隆昭

熊野本宮語り部の会会長、観光カリスマ 坂本勲生

日本ウオーキング協会副会長、歩く観光振興アドバイザー 村山友宏

【司会】 それでは、ただいまからパネルディスカッション「街道から始まるまちづくり」を始めさせていただきます。

本日は、近畿における、街道を介した地域づくり、まちづくりなどに取り組み、活躍している方々にお集まりいただいております。

ふだんより街道の魅力に関し特にご関心をお持ちの方ばかりですので、身近なお話から未来の展望まで、活発なご意見が交わされることと思います。特に、まちづくりという今後の生活に密着したお話ですので、皆様最後までぜひお聞きになってください。

それでは、本日パネルディスカッションにご出演いただきます方々を紹介させていただきます。皆様の経歴につきましてはお手元のプログラムにも詳しく記載いたしております。

【井戸】 改めまして、皆様こんにちは。

これからパネルディスカッション「街道から始まるまちづくり」を開催させていただきたいと思いますが、時間が予定より、現時点で20分ぐらい押しているようでございまして、90分ぐらいの予定で、大体5時40分ぐらいに終わることを目標に進めさせていただきたいと思います。

近畿にはいろんな街道があり、今日ごらんいただきましたように、いろんな団体が活動されているわけですが、実は、近畿の街道関係の組織がこうやって一堂に会して発表会をし、交流をするというのは初めてのことでして、今日はほんとうに、非常に画期的な会なんです。特に、大阪府さんを中心に、こちらの近畿街道・交流ネットワーク推進会議、これが去年の暮れにできまして、1回目これをまずやろうということで、きょうに至ったわけですが、ほんとうに皆さんご苦労されたと思います。この場をおかりしまして感謝申し上げたいと思います。

今日は、そういうことで、街道に関連するまちづくりの皆さんの中から4方お越しいただきまして、始めさせていただきたいと思っておりますが、まず最初に、1巡目といたしまして、現在のご自身のご活動とかを自己紹介を含めて簡単に、5分ぐらいでお話をいただきたいと思います。時間の関係がございまして、私はこういう、レッドカード、イエローカードじゃなくて、黄色信号と赤信号でございまして、ぼちぼちまとめてくださいという、こういうのも準備しておりますので、どうぞよろしくお願いたします。

では、まず、なら燈花会の会長朝廣佳子さん、観光カリスマでもいらっしゃいます。お願いいたします。

【朝廣】 改めまして、奈良から参りました朝廣と申します。

きょうご出演の皆様は街道のエキスパートばかりでいらっしゃるんですけども、実は私は街道とはちょっと活動が離れるんですが、そういう意味でお役にたつかわかりませんが、頑張ろうと思います。それと、もう1つ、きょうのプログラムの私の顔写真と実物がちょっと違うんですけども、少し時間がたっておりますので、それもおわびをしておきます。(笑)

私は、仕事は情報誌の編集をしておりますが、まちづくりは、20代のときから青年会議所というまちづくり団体に入りまして、活動をさせていただいておりました。

ちょうど、1999年に理事長をさせていただきましたときに、40周年を記念しまして、カウントダウン2000 in NARA という事業を奈良公園で行いました。このスライドの写真ですが、1000年越えの大晦日の夜、1999年から2000年に変わるときに、寒い中、あの上の若草山に1,000登



っているんですが、1,000人の人文字をかいて、ふもとでは1,000人の音楽隊の皆さんが歌を歌うといったような事業を、世界65カ国にテレビ中継をしていただきました。

今のところにもあったんですけども、私がさせていただいておりました、なら燈花会が、こちらのスライドになります。なら燈花会と申しますのは、同じく1999年の夏に始めた、新しい奈良の夏のお祭です。これは奈良公園一帯を会場にいたしまして、8月6日から15日までの10日間、夜7時から10時前まで毎晩、約1万数千個のろうそくの明かりを演出すると、そういった内容です。

これは各会場、エリアごとに特徴をつけておりまして、これは竹明かりのエリアと申します。

これが浮身堂と鷺池のエリアでございます。

時間を考えてちょっとしか持ってこなかったんで、実物は、また夏に見にいらしてください。

この祭なんですけれども、新しい祭なんですけれども、奈良の夜の風景に非常に溶け込んで、何か皆さん、ずっと昔からあったように思っていたら、初年度、99年は17万人の方にお越しいただきまして、6年目に、過去最多の70万4,000人。昨年はちょっと天候の関係で、60万人というお客様にお越しいただくまでになりました。

さらに、この燈花会の特徴が、市民が運営をしているということで、企画から準備、そして協賛金集め、また期間中のすべての運営からすべて、燈花会の会は市民が行っているというものです。

その辺のことについては、また後ほどお話をさせていただきたいと思っておりますが、燈花会の会長を6年間させていただいた後に、一昨年でおりまして、その後、今は奈良遷都祭というイベントの準備をしております。

奈良は2010年に平城遷都1300年を迎えます。その2010年の半年間に世界中の方々、もちろん国内の方々もお呼びして平城京ルネッサンスに浸っていただくという計画が進んでいるんですけども、私がさせていただくのはもっと小さい規模なんですけども、奈良市が毎年、奈良遷都祭というのを続けておりまして、一昨年まで市が直接やっていたんですけども、民間の有志に委ねようということで、私どもがかかわらせていただいております。

今のところ、4月27、28日の夜と、29、30日の4日間、リニューアルをして行うというものです。場所が、ちょうど今平城京のところに第1次大極殿の復元工事を行っているんですけども、その前のところを会場に使わせていただく予定です。

その中の1つに、街道を歩くというイベントを行う予定で やっと街道が出てまいりましたんですけども 飛鳥から藤原京を通過して平城京まで、約30キロの道のりを歩く。この30キロなんですけども、30キロを歩くというよりも200年ウオークという名前をつけさせていただいています。飛鳥京、藤原京、平城京という、この3つの都が移った200年の時代を歩いていこうというような、そんな、わくわくした気持ちで歩いていただきたいなと。今50年歩いたな、やっと120年ぐらいになったなとか、歩きながら、そんな思いで時間を感じていただければなと思っております。

また、ウオークといえば、そのほかにモーニングウオーク・イン・奈良というのが今、奈良で立ち上がってまして、夜の次は朝と。奈良の朝を今度は売り込んでいこうということで、そういったことも皆さんと一緒にさせていただいております。

とりあえずは以上です。

【井戸】 ありがとうございます。

私は、2000年のカウントダウンは家のテレビで見ていたんですけども、奈良でこういうことが起きるのはすごいというので感心いたしました。あれはだれがやったのということを聞きますと、JCさん、青年会議所さんだということを知りまして、すばらしいリーダーの方が出現したんだなと感心しておりましたんですけど、それが朝廣さんです。

奈良みたいな古いまちで、こういう新しいことを若い人がやるということに関して、ほんとうに画期的なことなんですけど、難しいことでもあろうと思うんですね。何か、そういう点について、簡単にできたことは多分ないと思うんですけども、一言ご紹介いただきたいんですが。

【朝廣】 そうですね、運営の難しさ等については、また



後ほどお話しさせていただくとして、突然、なら燈花会というのがぼっと出てきたのではなく、やっぱり私たちも、私が入っていた青年会議所、そのほかの青年団体と一緒に、その前に奈良祭という祭を10年間行っています。朱雀門の前で行ったんですけれども、奈良らしい観光客を呼べる祭を目指していて、結局、奈良というのは古い伝統文化、あるいは社寺があって、そういったところに勝てるといったら勝てるわけないんですけれども、違う切り口で持っていこうという非常に無理があって、その10年間、いろんな新しいことをやってみて、結局うまくいかなかったんですね。

だけど、その運営があったからこそ、燈花会をその運営でなれていたメンバーがすんなり立ち上げることができた。その10年間は決してむだではないんですが、だから、それがあったからこそ、ほんとうに奈良の人たちが奈良に何を求めているんだろうと。祭をどういうふうに位置づけたいんだろうということをみんなと話し合いました、それでこの燈花会が生まれたということなんです。

【井戸】 なるほど。ありがとうございました。

続いては、次に岸上さんのほうにお願いをしたいと思います。

岸上さんは枚方宿まちづくり協議会の事務局長さんをされているということですが。

【岸上】 ただいまご紹介いただきました、枚方宿地区まちづくり協議会事務局長をしております岸上と申します。どうぞよろしくお願いいたします。

皆さん、枚方というと、やはり先ほども出ていましたけども、菊人形が一番、頭の中にあると思うんです。残念ながら、昨年度の「義経」が最後で終わってしまいました。私も小さいときから、枚方パークに行かんとあかんのやというような気持ちで毎回行っていましたので、非常に寂しい気がします。財政的な面もあるというふうに聞いていますけども、実際、一番大きな問題は後継者の問題だったんです。

簡単のように見えるんですけども、菊人形をつくるというのは、ものすごい熟練した技術が要ります。一人前になるのに10年、20年かかるというようなことで、去年の「義経」のときも、5人ぐらいの、もう70代、80代の方がされていたんですけども、中には、その期間中にも1人亡くなったという形で、また減ってしまった。後、続いてくるような技術者が育ってこなかった、これが一番大きな原因だったと思います。それと、花火大会、くらわんか花火大会なんかも、大阪の方やったらよくご存じだと思うんですけど、これも平成15年に終わってしまいました。

そんな中で、我々枚方市としたら、これから何を皆さんにアピールをしたらいいのかなというふうに考えたんです。そこで出てきたのが、先ほどから出ています東海道57次、56番目に枚方宿があるやないかというようなことなんですよ。

神坂先生の話聞いておりましたも、参勤交代の話が出ていましたよね、ものすごいお金がかかると。枚方宿というところも、和歌山の徳川、松平家が参勤交代のときに、和歌山を出発いたしまして、まず1泊目は貝塚、その次に必ず枚方でお泊りになるということなんです。したがって、枚方宿には神坂先生も言うてはりましたけども、本陣というところがあるんです。これはお殿様が泊まれるところなんですね。そして、また加賀のことが出てましたけども、松平家というのはものすごいお金持ちですから、大名行列も3,000名どころか4,000名を超えたということなんです。枚方宿というのはわずか1.5キロぐらいのところなんです。そこに4,000名の大名行列が宿をとるということは、これはすごいことです。また、そのころというのは、あんまり楽しみがないんですよ。したがって、その周りの村からたくさんの方がその大名行列を見に集まってくるということで、それはそれは、ものすごい人で、活気のあった枚方宿だというふうに聞いております。

ところが、現在見てみますと、その面影はほとんどなくなってしまっているんです。それよりも、街道に来られた方が言うてはったのは、何と車の数のほうが多いのと違うかと、そういう感じになってしまいました。まだまだ、私が小学生のころにはたくさんの歴史的建造物も残っていましたが、また古い町屋もありました。しかし、ほんとうに、もう中学ぐらいから大阪のベッドタウンとして枚方も急激に発展しましたので、宿場町のところもさま変わりといいますか、マンションが建ったり、あるいは駐車場になってしまったり、非常に寂しい思いをしています。

我々はやっとそのときに気がついたんですよ。枚方宿というすばらしい持ち物を持っているのに、それがこんな状態にまでなってしまった。でも、遅過ぎると言う方もあるのやけども、今

何か我々がしなかったら、ほんとうに面影が全くなってしまうの違うかというふうに危機感を抱きました。

そこで平成12年にまちづくり協議会を立ち上げて、せめて、これからはしっかりとこの面影を守っていこうやないかと、この町並みを残していこうやないかと。そして、また江戸時代のような活気のある、皆さんが楽しんでいただけるような、そんなまちづくりをしていこうということで今現在、頑張っております。

今見ていただいているのが枚方の宿場町の中で残っている、三十数軒残っているんですけど、古い町屋の風景です。一番左上のほう、これは小野家といいまして、枚方宿の中でも一番東端に位置しているんですけども、建築が大体江戸時代の末期、幕末のころやないかというふうに言われております。現在も保存状況が非常によく、これを見ていただいたら、ああ、枚方宿場町、ほんとうに古い町やなと感じてもらえるのやないかと思えます。

すぐ下のほうは、今現在も商売されています、手づくりのおみそを売り物にされています。名前が菊人形みそと、先ほどの話ですね。菊人形からとったということで、今も非常にファンが多いです。この間もNHKでこのおみそのことを放送していました。普通でも忙しいのに、またいるんなところから注文が届いたというふうに聞いております。

こちらの手前のほうはオクノ家、下のほうは八ダ家といいまして、この辺は古い町屋が残っていたんですけども、修景補助という形で建てかえられる、あるいは改装されるときには街道にふさわしいような景観でお願いしたいということで、できた町屋でございます。

総会と役員会の風景です。これは去年ですけれども、総会の後に、立命館大学の高田教授に来ていただきましてパネルディスカッション、「枚方宿の魅力発信」というテーマで行いました。役員会のほうは年4回ぐらい行っております。

我々も勉強する必要があるということで、必ず1年に1回か2回、まちづくりが進んでいる地域の訪問をいたしております。関宿と近江八幡の風景の写真が映っておりますけれども、我々としたらできるだけ、単に訪れるだけじゃなしに、そのまちづくりをされている地域のリーダー方と話し合う機会を必ず持つようにしております。

それと、一番問題は、我々地域でいろいろな行事をやったりして頑張っているんですけども、それをいかに地域の方々に知っていただくか、これが非常に難しいんですね。ともすれば、やっている者だけで終わってしまう、それではいかんということで、我々の活動を細かく地域の皆様方に知っていただくという形で「まちづくりニュース」の発行を行っております。

というような形で日ごろ活動しているんですけども、先ほどから街道ということが出ているんですけども、ほんとうに我々はいいものを持っていると思うんです。ただ、それをどのように皆さん方にアピールしたらいいか、これがほんとうに、これから我々も一生懸命考えていかないかなというふうに考えております。

【井戸】 岸上さん、1つ質問をさせていただきます。

先進地視察の状況が出ておりましたけれども、やっぱり、この地域づくりリーダーの方同士がいるんなところに行って、お互いに学び合うというのはものすごく大事なことだと思うんですけども、行かれたときに何か感じられたこととか、勉強になったこととかがあったら、少しだけご紹介いただきたいんですけども。

【岸上】 そうですね、例えば、我々が訪問するところで、枚方宿に比べたらずっと江戸時代とか明治時代初期とかの歴史的建築物が残っているところがたくさんあるんですよ。ところが、地元の人と話をしますと、残っていることは残っているんですけども、まち自体があまり活性化されていないというようなことをお聞きするんですね。

あんまり例を出したらいいかのもしれませんけども、関なんかもすばらしい町並みです。古いものがいっぱい残っています。私も、こんなすばらしいまちはないと思うんですけども、ところが、平日であったためかもしれませんけども、人がほとんどいてないんですよ。買い物とかで日常生活されている方も見えない。その点を私は質問したことがあるんですけども、皆さんどうされているんですかと。いや、ここはちょっと生活しにくいから違うところで生活していますと。あるいは、ここは晩に泊まりに来るだけですか、何か、生活のにおいが消えてしまっているんです。

反対に、長浜とかに行きますと、今度は商業ばかりが目についてしまうんですね。いかにもこういう言い方をしたら失礼かな お金もうけと言うたらおかしいんですけども、たくさ

んの観光客に来てもらって商売が繁盛して、それでもうかったら、また地域に還元しているんなものをつくってというようなところと、2つに分かれてしまうと思うんですね。

それを見て、枚方宿は一体どうなんやろうなと。そんなに自慢できるほど古いものが残っているわけでもない、かと言うて、商業で訴えるものもない。その中で我々がこれから考えていかないかんのは、やはり我々の地域にしかない固有資産、それを発掘していくことということを今感じています。

【井戸】 多分、あれでしょうね。地域の数だけ、どっちの方向を目指すのかというような答えがあるんでしょうね。

【岸上】 そういうことだと思います。

【井戸】 ありがとうございました。

枚方宿地区まちづくり協議会の岸上事務局長さんでした。

それでは、大先輩、お願いしたいと思います。

熊野本宮語り部の会会長、観光カリスマでもいらっしゃいます、坂本勲生さんです。

どうぞ、よろしく願いいたします。

【坂本】 私たちの取り組みなんですけれども、これを見ていただいたらおわかりのように、この緑の服を着ているのが熊野本宮町の語り部です。このようにお客さんに古道を案内しながらいろいろとお話をする、そういう活動をやっているわけなんですね。

ここに6つの王子が出てきておるんですが、普通私たちが案内しておりますのは、左上から2番目の発心門王子から湯の峰王子へかけての5つを案内しておるんですが、それぞれに歴史があるわけです。この中にいろんな文化遺産が残されている。そういうものを古くは平安時代からの日記等を利用して、当時にはこういうふうなお参りの仕方をしましたよというような案内をしながら歩くというのが大体、私たちの仕事なんです。



ただ、それだけでないしに 左下のほうを見てください。木に注連縄が張っております。これは実は、発心門王子のすぐ近くにある山の神なんですね。江戸時代からずっと続いている、地域の山の神。ここには、いまだに、その当時からの伝統が残されておるわけなんです。実は、この前の白い棒ですね、これは削り花と言われているんです。今は削り花ができる地域はわりと少なく、ここだけは山の神があるときには削り花ができるんです。山の神というのは女の神様やということは皆さんご存じだと思うんです。よく男の方たちが「うちの山の神は」と言って、奥さんのことをおっしゃる。女の神様であると言われます。ですから、女の神様が喜ぶものを供えるというのが昔からのしきたりでありました。

だから、魚なんかは、あんまりきれいな魚は上げないんです。山の神様が自分より美しいもの、姿のいいものを上げられると、怒って災いを及ぼしてはいけないということから、何を上げるかというたら、おいしいけれども不細工な魚、オコゼを上げる。これが数年前までここではやられておったようですね。ですが、最近はオコゼも手に入りにくくなって、この削り花だけになった。この削り花というのは、男性のシンボルを芸術化したものなんです。行って見てもらったら、すばらしいですよ。

こういうふうなお話。古道の中にはそういう歴史的なものとか、あるいは文化財的なもの以外に、文化的景観と言われている自然と、地域の人々が長い年月をかけてつくり出していった景観、景色があるんだということですね。そういうものを中へ入れながら歩きます。

この右手の写真は、左にある石碑が発心門地域を江戸時代に開発した方の称徳碑。それから右が、私はよく助産婦ですよと説明するんですが、子安地蔵さんなんです。江戸時代から、地域の人々は妊娠しますとここへお参りして、安産を願うと。今でもこれが使われているんだという形で、いわゆる民間信仰、古道沿いにはそういうお医者さんに関するものがいっぱいあるわけなんです。歯痛の地蔵さん、あるいは整形外科に当たる腰痛の地蔵さん、そういうものなんかがありますが、そういうものも皆さんにわかっていただくように説明する。古道は総合病院ですというようなお話もさせてもらったりしております。

大体毎日、だれかが歩いておるんですけれども、地域の資源を何とか掘り起こしていくという

形で、地域の資源についてお話をします。たとえば、日本ミツバチのたるが座っておりましたら、それをもとにして、これは中世のころからの地場産業なんですよというお話だとか、あるいは、田畑に植わっております作物で、ここの特徴ある食べ物はこういうものですよと、これを地域の人に語っていただくような橋渡しをする、これも語り部の1つの仕事だと思っております。

そして、歩いておられますと、とにかく日々変わっていく自然の様子がよくわかるわけなんです。もうじき何々という草が花を開かせますよ、山野草が花を開かせますよ、あるいは、山にはこういう花が開いてきますよというようなことを観光協会へお話をし、観光協会からそれをお客さん方に発信してもらうような取り組み、そういうこともやっておりますし、それと同時に、自然のすばらしさと同時に、ここを歩くことが健康のために非常によろしいんですよということ、歩き方を皆さんに発信する。

和歌山県では古道と健康という形で、一昨年から昨年へかけて、古道を中心に医者さんとともに歩いていく調査をしているわけなんです。その中でわかったこととしては、まず、古道は非常に紫外線が少ないということ。普通のところの50分の1であるということがはっきりわかってきたんですね。それから、ここを歩くことによって、成人病のもとになるという体脂肪を減らすということが明らかになった。次に、足の筋肉が鍛えられる、特に大腿部の裏側の筋肉を鍛えることができるということがはっきりしてきた。それと、ストレスが解消されるということ。そして、前頭葉を活発化するという、それと同時に、病気に対する免疫力が高まる。そういういい面がたくさん出てきたわけなんです。

それを多くの方々に発信して、そしてまず、本宮へ来て歩いていただくというような取り組みが、今、行われておるんですね。本宮町の役場内に元の役場で、今は行政局と呼んでおるんですが、熊野で健康ラボという部屋をこしらえまして、そこから発信していくというような試みを今、しているということなんです。

【井戸】 ありがとうございます。

坂本さんは校長先生から町史の編纂室に行かれて、そして文化財の委員をされて、そして現在に至るということでございますので、ほんとうにいろんなご経験、知識を含めてお持ちでいらっしゃるにしまして、そういう意味では、ほんとうにすばらしい、地域の資源の掘り起こしをされているなと感心いたしました。

1つご質問させていただきたいんですが、最後に、歩くと健康になるというお話がありました。これは当然、足が強くなるとか、ストレス解消とかがあるんですけども、熊野古道独特のご利益があるのは、やっぱり紫外線の問題なんかは熊野古道の。

【坂本】 それと、もう1つは、適度なアップダウンがあるということ。これも、古道であるからということが言えると思うんですね。

実は、一昨年の健康調査のときに、和歌山市周辺の平地をずっと歩く方と、熊野古道を歩く方を選んで、両方を1カ月余りやったわけなんです。その中でこういうことがはっきり出てきているわけなんです。ですから、確かに、健康にはいいんじゃないかと思えます。私は今78歳なんですけど、今でも多いときには10キロ、少なくとも7キロ、最も多くなると十二、三キロ案内するということをやっているわけなんです。自分らの年齢の人が語り部の中には何人か入っているわけなんです。

【井戸】 資源の掘り起こしから科学、スポーツまでの坂本さんでいらっしゃいました。どうもありがとうございました。

では、4方目でございます。歩くということが随分お話に出てまいりましたが、村山友宏さん、日本ウォーキング協会の副会長であり、かつ歩く観光振興アドバイザーという肩書きもお持ちでございます。

村山さん、外部の目から見た関西ということも含めて、お願いいたします。

【村山】 外部とおっしゃいましたが、私も関西人でございまして、神戸で生まれて姫路の奥で育った者でございます、東京から来ましたけれども。

街道という言葉、私も皆さんと同じように大好きでありまして、街道というのは何といういい響きの言葉でしょうか。そして、また激しい郷愁を呼び起こす言葉だと思うんですね。きょうのタイトルで、私は「街道から」の間に「歩き」という言葉を入れました。街道歩きから始まるま

ちづくりと。

これは街道を歩いていて、たまたま四国遍路道の20番札所の途中で道草をしていたときに、石垣にあったものを見つけて撮ったものでありまして、これは何という花でしょうかと言ったら、地元の方はほとんど名前がわからなかったんですが、皆さん、おわかりの方いらっしゃいますか。何人かいらっしゃいますね。

これはフコサンゴ、あるいはマルサンゴといいます。サンゴの実のようになっていますが、これは車で通っているとわからない、地元の方はほとんど車で通過していますから、なかなかわからなかったんですが、やっぱり歩いてないと、こういうのがわからないという例で挙げております。



私は街道歩きをこれからどんどんやっていきたいんですが、私にとって街道というのは美しい女性かなと、魔性を秘めた女性かなと思っておりまして、入れあげたら、なかなかやめられない、何か人生を間違えんじやないかと思うぐらいに大変奥深いものを感じております。

活動紹介ということですが、これは2001年に五街道、正確に言うと天満宿駅の制というのがありますが、そのちょうど400年を期したときに、街道を通じた地域づくりのリーダーが長崎に集まりまして、2002年に東京日本橋で全国街道交流会議を発足させました。このときの立ち上げの仕掛け人が、きょう会場においでになっていますけど、コガさん、ちょっと立ち上がってください。いらっしゃいませんか、先ほどいらっしゃったみたいなんですけどね。

これは、そういう形で長崎から始まっておりますが、発足は日本橋で始まりました。街道からの日本ルネッサンスということを標榜しながら、山口県の萩、東京日比谷公会堂、静岡、山形、愛媛、それぞれで全国大会を開催いたしました。そして、この地方大会もたくさん行われておりまして、そちらと連携をいたしております。

こちらにポスターがたくさん並んでおりますが、この後、各地でたくさんのもが行われているんですが、この一例でございます。

次回全国大会は、今年の11月24日、25日に飛騨高山で行われます。

この全国街道交流会議は、今NPOを申請中でありまして、この街道交流会議は大きく3つの役割を持っているわけでありまして。1つ目は、街道の連携・交流、そういう活動のネットワークセンターでありたいと。2つ目は、街道にかかわるまちづくりへのサポートセンターでありたい。3つ目は、街道文化全体のプロモーションセンターでありたいと、これが掲げている3つの役割であります。

私どもは街道にかかわる4つの大きなテーマを掲げております。街道おこしの4大テーマと書いてありますが、1つは、街道のコミュニティー形成機能、そして、街道が昔は生活の舞台であったと、そういう生活舞台性を取り戻そうと。もう1つは、街道の交流・連携の機能を高める。3つ目は、いわゆるふるさとの再発見あるいは再認識、そういったことを促してくれる街道であると。最後は、街道を守り、維持していく活動、アドプトとか道守とか、たくさんございますが、そういったことを育て、そしてまた、街道を歩くという楽しむ活動を充実させたいと、このような4つの役割をテーマ化していたわけでございます。

もう1つの活動がございまして、私はウォーキング運動を三十数年来やっておる関係で、街道とウォーキングが今リンクしております。人も社会も元気になると書いております。ほんとうにそのような時代になってまいりました。単に健康づくりだけではとどまらないという意味であります。

これは内閣府の世論調査のグラフでございますが、20年間ウォーキングだけが、あらゆるスポーツの中で右肩上がりでございます。二十数年前は10%台だったのが、今は40%台というふうになっておりまして、ものすごい数字で、一体これはどこまで行くのかなというのが恐ろしい数字でございます。

男女別に見ますと、50代の女性の60%が圧倒的に、ウォーキングをしたいという、ほんとうに驚くべき数字が出ております。

どのように、そういった効用があるかということを大きく分けると、5つの形であらわすことができます。中心は健康づくりであります。もう1つは、観光に効くということで、歩くとい

うことを通じてほんとうの観光のよさがわかってくる、地域のことがわかってくると。それから、教育というのは、子供たちが今、生きる力を失っておりますけれども、子供たちが歩くということによって、本来の人間性を取り戻す、そういった意味で教育に効くわけであります。それから、環境に効くというのは、歩くことによって自然を愛する気持ちがわいてくる、そして車を控えることによって地球温暖化の抑制に役立つ。それから、もう1つあるのは、世代間の交流、地域交流、国際交流、いろんな人々との触れ合いということであります。

全国大会がたくさんございますけれども、これはウォーカーたちが全国で交流する1つの仕掛けになっております。年間、これに大体200万人の参加者がおります。これらの人々が常に日本中を歩き回っておるわけであります。

さらに、国際交流が盛んになってまいりました。世界のウォーキング大国はイギリス、ドイツ、オランダであります。中でも、オランダは最も古い歴史を持っておりまして、ここにいるのはイギリスのスコットランドヤード、警視庁の方が来ているんですけれども、このように、国際大会として、だんだん華やかになってまいりました。

これはロビーにも展示されておりますように、私どもは国土交通省のご後援をいただきまして、歩きたくなる道を全国で500選びました。2,427件の応募の中から、実際にウォーカーがみずから歩いて選んだものであります。これは、市販される本に出ておりますけれども、ロビーにもあったんですが、すぐ売り切れになってしまったようでございます。

これはその一部で、近畿で実際に選ばれた道をマップの上に落とししたものであります。ちょっと字が小さ過ぎて見えませんが、こんなにあるというイメージだけをおつかみいただければいいと思います。

これは、和歌山、三重が入っていますね。こういうふうには、重立った歩きたくなる道が選ばれているわけであります。

これを使って、今、全国の500の道を連続して歩いていこうというイベントがこの1月から始まっております。約5年間ぐらいかけて、全国の500の道を歩いていくという運動を始めております。

ご当地、この近畿では、近畿本部というのがございまして、活発に活動いたしております。

ここにありますのは大和まほろばの道の大会の事例として、ポスターが上がっておりますが、ほかに、先ほどの熊野古道ウォーク、これは十数年前からやっております。それから比叡山ウォーク、高野山ウォーク、それから、最近では堺でツーデーマーチというのを始めております。兵庫県では加古川でツーデーマーチとか、近畿地方では大変ウォーキング大会が盛んになっております。

そこで私どもは、もう1つ新しいウォーキング大会があるということで、大集団で歩く大会ではなくて、10人か20人ぐらいの少人数で歩くエコウォークというのを提唱しております。これを全国的にまた展開しようと思っております。極めて少人数で学習型、そして環境をじっくりと楽しむといった動きをエコウォークと呼んでおります。こういったことが、今私どもの1つであります。

最後の1つですが、これはお知らせになりますが、今度4月からNHKのBSハイビジョンで、歴史街道の旅、何々街道てくてく旅というのが、これから約3年間にわたって連続、土曜日曜を除いた毎日15分、放送されます。まず、東海道が4月3日からスタートいたしまして、9月に山陽道ということで、8月中には御堂筋にこのウォーカーが集まりまして、山陽道ウォークを始めると、大変大仕掛けなものでございますけれども、こういった大型のテレビ番組が始まっております。私どもがその先導というか、中身をお手伝いしているわけでございます。

大体そんなところでございます。

【井戸】 ありがとうございます。

全国街道交流会議、それと日本ウォーキング協会のご活動をご紹介いただきましたけれども、全国街道交流会議にご関心を持たれていらっしゃる団体の方もここにいらっしゃると思うんですけれども、これはどんなふうになれば入会できるのかとか、入会資格はどうなっているのかとか、僕もほんとうは関西の幹事なので知っているんですけども、皆さんに一度ご紹介いただけましたらありがたいんですが。

【村山】 井戸さんからお答えをいただいたほうがいいんですけど。理事をされていて、最も街道運動のベテランでいらっしゃるから。

交流会議の入会資格というのは特にございません。だれでも入れることになっておりますから、会費だけ出していただければ、あとは入れるということになっております。団体であろうと個人であろうと、大いに歓迎いたします。プロ、アマ、全く関係ありません。行政の団体も入っておりますが、行政と一般の市民、それも全く関係ございません。これからいろいろと皆さんにお呼びかけをしていこうと思っております。

【井戸】 ありがとうございます。村山さんでいらっしゃいました。

ここまで、ようやく一巡させていただいたんですが、時間がやはり、大分オーバーになっているんですけども、これまでのお話、また、ここまでの第2部の各団体のご発表等を含めまして、非常に多くの団体の方、また個人の方が街道にかかわること、ウオークにかかわること、まちづくりにかかわること、いろんな動きが生まれてき、また発展してきているというように思います。

地域の交流もこういうもの、あるいは全国街道交流会議、いろんなものを通して活発になってきているというふうに思ひまして、前途は非常に明るいと思うわけなんですが、しかし、恐らく、活動の中のうまくいった部分はばかりではないと思います。そういう意味では、現地の方々、また現場の方々にしかわからないようなご苦労とか、あるいは問題点とか、工夫されて乗り越えられた点とか、いろんなものがあるかと思ひますので、そういう点につきまして2巡目にご報告をいただきたいと思ひます。

まず、今度は村山さんのほうからお願いできますか。

【村山】 わかりました。

じゃ、第2部というところをお願いします。

第2部は、一応、街道運動をやっている立場から、どういう課題を抱えているか、そして、どういうふうな工夫をしているかということについてご説明申し上げたいと思ひます。

これは英語で書いてございますけども、これは道と置きかえてもらってもいいんですが、街道というものの運動をする場合に、こういうことを基本的に考えたいということでありまして、申しわけありません、なれない英語が入っていますが、エクイティーと言ひます。これはアメリカの連邦法でエクイティーというのは、道路行政の中で大変重要な言葉になっております。一言で言ひますと、道というのは利用者にすべて公平に使われるべきである。車だけが占有するのは、やはり原則に反するという基本思想でありまして、道路は自転車も歩行者も車も、そして公共交通機関も、すべてのものが全くバランスよく公平にそれは利用されるべきであるという思想から生まれている、これは法律になっているものですが、日本でもそれが見直されつつありまして、車の道だけではなくて、人優先の道が今、始まりつつあるわけでありまして、

それから、エコロジー、これは言うまでもありません、環境に対する配慮。それからシーニック、これは景観がいいという意味ですが、街道景観が今、景観法に基づいて大変大きな課題になっております。4つ目は、ご存じ、スローフードから始まりまして、スローというのはやり言葉でございまして、私どもはこれをスローツーリズムと言ひ、ゆっくりと歩いて見回す。

私どもは観光というスタイルは、基本的に180度変えなきゃならないと思ひます。今までの観光というのは、簡単に言ひますと、駆け走る観光でした。ひたすら走り回る観光。それから、我々はやっぱり歩いて、ゆっくり、じっくり、そして浸る観光というのがこれから求められるわけで、滞在という言葉に直してもいいんですが、どちらかといえば、車で回ってどこかでどんちゃん騒ぎをするというスタイルから、じっくりと見て回り、そして、その環境、風景に浸るといふ、そういう浸る観光がスローのツーリズムであります。

それから5つ目はセーブ、これは街道文化遺産が今、滅びようとし、ほとんどなくなりつつあるわけですが、これを救わなきゃなりません。これはセーブエナジーとか、省エネで使われる言葉ですが、街道を救うという基本的で重要な課題があると思ひます。これについては、提案を後で申し上げます。

ウォーカーの立場から言ひますと、街道を歩くときにどうしても必要なのは休憩所なんです、簡単な休憩所。新たにつくる必要なくて、ここはお休みどころとしてご利用くださいという、いすがあるだけでもいいわけです。あるいは既存のお店を、どうぞお休みくださいというだけでもいいんです。これを今、全国に2,010駅つくろうと思ひます。自動車道には道の駅が既に830ございますけれども、やっぱり、それよりも多く必要なわけでありまして、その道の駅から車をおりて、その地域に歩いて旅を楽しむ。そういう道の駅につながる、歩く道の駅をつ

くろうというふうに考えているんです。これはほとんどお金がかからないということで、いろんな首長さんに話しますと、すぐやりましょうとおっしゃっていただいておりますので、そのうちに全国化するだろうと思っております。

これは熊野古道の中辺路のところの茶屋ですね。すばらしいですね。こういうのが、ほんとうの歩く道の駅だと思います。

これは東海道の実際にある歩く道の駅なんです、外国人の方も必ず寄ってくれて、やっぱりこれが昔の東海道の姿よねと言って楽しんでくれるわけですね。美しい日本を旅する休みどころという形でこれを増やしていきたいと。

そして私どもは500選の道を選びましたが、これはただ歩いて、さようならではなくて、みずから歩いた者の責任として道を維持し、そして育てていくという努力は当然要求されているわけでありまして、全国、九州、四国、そして関西、アドプトとか道守がどんどん広がっておりますけれども、私どもも歩く立場から、歩く道守というのを公募いたして、今ちょうど始めたばかりであります。

下のは、腕章でございますけど、こういうことも始めているということで、遅まきながらこれに取り組んでおります。

これは大阪の事例で、一般の道守、道普請でやっている姿です。

これはスイスで見かけたものでございますが、街道景観という事例で取り上げました。要するに、道守さんたちも一緒になって、街道を歩いていただく人に感銘を持ってもらおうと。何気ないものでございますけれども、心が非常にここに出ているように思いますね。スイスならではの言えばそうなんですけれども、日本だってこのような工夫ができるんじゃないかと思っております。

最後ですが、街道文化遺産。これを選定することによって、その消失を防止しよう。世界遺産も、消失を防止するというのが1つの大きな目的でございました。

というように、私は日本の街道文化は、ほんとうに大切な文化だと思っておりますけれども、それがだんだんなくなりつつある。これはぜひ選定すると同時に、大変な危機にあるというものについては危機遺産という形ではっきりと指定をして、それを行政と民間が一体となってこれを守るという努力の大きな目印にするべきだろうというふうに思っております。

ここでは簡単に例を挙げただけですが、こういうものは幾らでもあるわけですね。それから、目に見えない各ソフトの資料も含めて、街道遺産を守る運動を起こすべきだろうと思っております。

それから、街道文化財ウィークの実施をしたいというのは、各地でそういった、文化財を実際に自分の目で見て回って、自分の地域にどんな宝があるかということを知る作業がまず第一歩だろうと思います。ということで、このまち、この街道にはどういう文化財があるのかということ、みずから歩いて回る、子供たちと一緒に歩いて回る。そのことによって、こういう運動が始まるかと思っております。

これが第2部の部分でございます。

【井戸】 ありがとうございます。

2つのE、3つのSということで非常にわかりやすくまとめていただきました。また、歩く道守とか歩く道の駅、いろいろなアイデアをこれからやっていこうとされているということで、非常におもしろいご発表だったと思うんですけれども、さっき奈良の絵のポスターなんか出ましたけども、朝廣さん、何かご質問とかあったら。

【朝廣】 先ほどの大和路ツーデーウォーク、たしかゴールが平城宮跡で、私もウォーキングシューズを買って、参加しようと思っていたんですが、残念ながら参加できなかったんですけれども、あの道は私たちが計画している道の1つでもあって、実際に歩かれた方たちがどのような感想を持たれたのかなど。奈良って、もっと風情があると思ったのに 確かに、柳生街道とか吉野だったら大峯奥駈とか、そういうところは自然の中を歩くんですけども、あのツーデーウォークで歩いていただいた道というのは、町中を歩いていると思うんですね。そういう意味で、もっとこういう工夫をしたほうがいいんじゃないかとか、何かあれば、ぜひ教えていただきたいなと思います。

【村山】 私が歩いたコースは、今おっしゃるように、確かに町の中が多かったので、風情はやや少なかったかと思っておりますけど、それでもやはり、道の角々、辻々を見ると、そこにある石仏

だとか、小さなしるべ、そういったものを見ると、思わず、ここに古い歴史があったなということを感じるんですね。そういうものをもう少し、歩いている人がわかるような表示というか、または解説員といいますが、そういうものが目立ち過ぎるとだめなんですけど、そういうものがあると、やっぱり興味がそそられるなど。だから、道をきれいに整備する必要はなくて、そういった案内のシステム、案内のソフトを充実すれば、もっともっというんな人が楽しめるかなという気がいたします。

あまりにもたくさんのコースがあるので、まだ十分見ておりませんが、私の歩いたところは、もう少し道案内のシステムがあればなという感じがいたしました。

【朝廣】 ありがとうございます。

【井戸】 ありがとうございます。

では、次に坂本さん、お願いしたいと思います。世界遺産登録もされまして、いろんなご苦労もあったかとも思いますし、そういう中で工夫されていること、また今後の課題に思っている点など、お願いいたします。

【坂本】 それでは、今私たちが工夫していること、そして課題だと思っていることについて申し上げてみたいと思います。

ここは、自分たちの研修会の様子を見ていただいたらと思うんですが、左上の一番最初が、これは花の研修会なんです。先ほどのお話もありましたが、歩かれる方が50歳以上の女の方が60%以上、熊野古道も同じことなんです。退職された方で、時間と経済的な余裕のある方が結構歩きに來られるわけなんです。ですから、花に対しては非常に注目されるわけなんです。そこで、自分たちももっともっと勉強しようということで、研修している一コマです。

次が、新人語り部へのアドバイスというふうな形になっておりますが、新人語り部といえますと、何回か研修をして、自分でもう一人前に歩けますよというふうになった人たちには、私たちの会の役員が同行して、各場所で、その人なりにお話をしてもらうわけなんです。そして合格すれば、もう一人前でやってもらってよろしいという形をとっているんですが、一遍ではなかなかそうはいかないということが多くて、後また、しばらく研修してくださいという形で研修していただく。そういうシステムで、語り部になってもらっているということなんです。

これは健康効果の話等をどこでやるんかというあたりで、森林浴を兼ねた古道沿いの山の中でやるということをよくやっております。

それから、次のが部屋の中での学習会です。学習会は主に古文書、江戸時代の文章で、こんなおもしろい記録があるような話だとか、あるいは先ほども触れました『ジュウユウ記』とか、藤原定家の『熊野御幸記』、そういうものの学習をやって、それをどこで、どう使うかというあたりの学習をこういう形でやっている。そして、次は実地研修という形で王子へ行って、そういう勉強をしてもらおうと、そういうことをやっていくわけですね。

こういうふうにしなごう、一応、何を養成していくということと、古道はほかの外道と少し違っていて、いわゆる山道が古道になって、世界遺産に登録されております。だから、気象条件によって保全管理というのが非常に大変なんです。例えば、台風が来たときなんかは、いわゆる風倒木があちらこちらで出てくる。それを教育委員会の職員と、文化財保護委員会あたりが一つになって回って行って、後から全部、古道を調査してくる。そして、自分たちの手に負えるものは全部切ってくるんですが、そうでない場合は、森林組合の業者に任せるという形で保全していかなければならない。

それから、集中豪雨等があった場合、いわゆる表土が流れてしまって、浮石がいっぱい出てくるわけなんです。そうすると、歩く方が非常に難儀する、場合によってはけがをされるというような中から、この道をどう保全するかということで、自分たちでやっておることをちょっと申し上げます。

私たちは、そういう場所がすぐわかります。そして、これは、語り部が奉仕で土を入れているところです。それから企業、去年は積水ハイムですか、その会社に勤務されている方々が親子で奉仕して土を入れてくれておりました。また、中学生もこれに参加してくれておるという形で、多くの方々の奉仕によって、これを維持・保全していくための努力をしているということです。ここらあたりが、今後、大きな課題になってくるだろうと。長い長い年月をかけて、後世へ伝えていくために、町としましては、道の周辺、右左5メートル以上づつを買い入れて、そこらあたりの景観をいいものにして残していこうと努力してくれておるわけなんです。それを保全する

ために自分らとしてはどういうことができるかということ。

地域の方の中には、今、ワガラヌイソシイまちづくりという形で1つのグループをこしらえて、こういふことにどんどんと力をかけてくれると。まちづくりの一環として、こういふことへ手をかけてくれる地域の方も今、出てきているということなんですね。

今、私たちが一番困っている状態というのは、この道を見ていただいたら、こういふ道がかなり多いんですが、これはどうでしょう。2,000人とかの人がバスガイドさん1人が引率して、50人の人を歩かせていく。そういう車が25台も続いてやってくるというようなことになったときに、こういふ道をいっぱいになって歩かれるわけなんです。この道の両側には、今にも開きそうな春の花とかがいっぱいあるわけなんです。それを、そういう形で歩かれる方は踏みにじっていくわけなんですね。そして、花が台無しになる。

ある場合には、せっかく咲いておる見事なササユリをとって、自分の胸に誇らしげに差して歩かれる。そういう方があったりして、非常に困っているわけなんです。語り部さんと一緒に歩く方は、自分たちが土を持っていこうとしたら「私たちも持ちますよ」と言って一緒に持ってくれるぐらい、皆さん大事にしてくれますし、だれかが花をとろうとしたら、「だめだ、これはみんなの花ですよ、写真でとるのはいいけれど」と言って、だれかが注意してくれるというような形で、皆さん守ってくれるんですが、語り部がつかない観光客という方は、そういうふうな最低のマナーも守っていただけないときがあるんですね。これが非常に困っている状態だということなんです。

【井戸】 なるほど、ありがとうございました。

研修とか、道の保全に対する奉仕の問題等々、いろんなことを工夫されているということがよくわかりました。

それと、後半では、観光客あるいはウォーカーもそうかもしれませんが、マナーの問題をご指摘になりましたけれども、これは村上さんを責めるわけではございませんが、村上さん、何か、特にマナーアップみたいなことに関して感じていらっしゃる、取り組んでいらっしゃる、ことがあったら。

【村上】 おっしゃるように、子どもは歩きながら一番注意しなきゃならんことは、人間が活動すれば、必ず環境を汚していくという存在であるということに自覚することだと。そうすると、やはりウォーカーこそが最もマナーを守らなければいけない。空き缶を捨てる人がいっぱいいますけれども、我々はそれを拾って歩こうと言って、今、五街道クリーンウォークというのを国土交通省さんからのご協力もありまして、五街道を歩いて、ごみを拾うということを徹底してやっております。それをすることによって、もっとマナーが確立するだろう、そして、これを実際にはエコウォークという運動の中でエコマナー、エコガイド、エコリーダー、そういう人たちがマナーについて徹底的にやろうと。いろんなパンフレットで啓蒙活動を今やっております。でも、まだまだ不十分だと思っております。

【井戸】 ありがとうございます。

ちょっとお待たせしました、岸上さん、次をお願いしたいと思います。工夫されている点、また今後の課題、お願いします。

【岸上】 今お話を聞いていて、熊野さんなんかでも、たくさんの観光客が来られるという悩みをおっしゃっています。我々にしたら、ほんとうはたくさんの方に来ていただきたいんですよね。ところが、世界遺産になるようなものもありませんし、また先ほど話したように、枚方というのは人口40万を超えて、かなり大きいまちなんですね。また位置が、ちょうど奈良と京都と大阪のど真ん中ということで、正直言うて、どこへでも気軽に出て行ける場所なんですよ。

したがって、今、我々が枚方宿というようなことを言っても、まだまだ枚方市民に興味を持っていただくところまで行っていない段階であるんじゃないかなというふうに思うんです。とりあえず一遍、東海道57次の56番目の枚方宿へ来てくださいますと皆さんに一生懸命お話しせんと、ほんとうに興味を持っていただけないという現状なんです。

我々といたしましたら、協議会のほうでも、とりあえずまちのにぎわいを創出するために、平成14年に街道菊花祭の実行委員会というのを立ち上げました。そして、街道菊花祭をやることによって、一遍枚方市民にも、この宿場町を覗いてもらおうやないかというふうな方向で、今、話を進めております。

今見ていただいているのは、街道菊花祭の菊を展示している状況です。先ほど、うちの会長も話をしていましたけれども、枚方市内の小中学校で200鉢ぐらい、いつも菊を育ててくれていま

す。それを10月下旬から11月中旬にかけて、3週間の間、この街道のほうに持ってきていただきまして飾っているという形になっております。

下のほうに白いのが見えると思うんですけども、これもまた我々の街道菊花祭りの1つのイベントであります俳句。これを広く枚方市民の皆さんに興味を持っていただくということで、俳句を募集しております。そして、参加していただいた俳句を、この菊の花に一つ一つつけて、街道を歩いている皆さんに俳句も楽しんでいただくという方向で進めております。

街道菊花祭の中で寄席もやっております。今写っておるのは、枚方市の職員さんです。ほとんどアマチュアの方ばかりなんですけども、レベルは非常に高く、街道菊花祭で花を見にこられた方が、この街道寄席にちょっと寄って話を聞くのも楽しみにしていただいていると聞いています。アマチュアなんですけども、この会から桂小春団次さんとか、北野まことさん、それからタージン、この辺が一生涯懸命皆さん方にお話ししておって、それで、だんだん腕を上げてプロとしてデビューしていったという話もございます。

そして、先ほど話した俳句大会ですね。ちょっと見ていただきたいんですが、これは俳句大会の厳正な審査をしている状況の写真なんですけども、天井を見てもらったらわかるんですけど、これも非常に古い建物なんです。枚方宿の中にあります鍵屋という、これも江戸時代末期から続く、非常に有名な宿ですね。その中で審査を行っている風景でございます。

そして、ほかにもいろんなイベントを行ったんです。枚方というのは、また学生の町でもございまして、枚方市内に大学が6つあります。関西外大とか国際大学というふうに、世界のいろんなところから留学生も呼んでいる大学もございます。その学生さんに話を聞いてみても、枚方市駅周辺、そんなの聞いたことないというのがほとんどなんです。いろんなところから通ってきて、そのまま、また電車に乗って自分の家に帰っていく。したがって、枚方宿なんて全く知らない。それも寂しい話なので、とりあえず、もっと興味をもってもらおうということで、例えば留学生を招きまして、着物を着ていただいて枚方宿を歩いていただく、あるいは人力車を借りてきまして、それに乗って鍵屋まで行ってもらうとか、いろんなイベントを考えたんですけども、まだまだ浸透することまではいきませんでした。

そこで、一遍ジャズでもやろうかという話が浮かんできたんです。それで、ジャズストリートというのを立ち上げました。これは演奏会の風景なんですけども、枚方宿という街道沿いですべて行っています。1年目は6カ所で行ったんですけども、2年目はちょっと増やして9カ所と。今年なんかは、もうちょっと増やしていこうと考えております。

すべて無料で、前回のときは佐藤さん、全国的に非常に有名なジャズピアニストなんですけれども、その方にも来ていただいて、街道沿いの近くに、古いお寺が集まっている寺内町がございまして。その寺内町のお寺というの、ほんとうに鎌倉時代、平安時代から続く由緒のあるお寺です。その境内を借りまして、今言うように佐藤さんとか海外から来られているようなジャズミュージシャンにも来ていただきまして、今見ていただいたお寺、すぐわかりますね、非常に有名なお寺なんです。そういうところでジャズの演奏会を行っております。プレーヤーの人に聞いても、これだけ古い、由緒のあるお寺で演奏したのは初めてです。お寺を借りてジャズの演奏会というのは心配していたんですけども、たくさんの方に喜んでいただいて、また、このジャズという音楽はお寺に合うものですねと、また来年もこういう機会があればぜひ寄りますよというふうにお褒めをいただいております。

こういうふうに、今後、枚方宿としたら、このジャズストリート、今は6月のプレイベントとして、ビッグバンドのジャズストリート、それと11月の第1週の日曜日がジャズストリートの本番という形で、年に2回進めておりますけども、もっとこういうふうな、枚方宿で気軽に音楽を楽しめるところをつくってほしいという声もいただいておりますので、できましたら今年あたりは回数を増やして、より皆さん方に楽しんでいただく。そして、この枚方宿にとりあえず一遍足を運んでもらって、いろんな古い建築物とかを見て、枚方宿のことをわかってください、東海道56番目の宿場町枚方ということをもっとご理解くださいというふうに今後もアピールを続けていきたいと考えております。

【井戸】 ありがとうございます。

岸上さんは、世界遺産ありませんと言って謙遜されますけども、やっぱり都会ならではの工夫を随分されていらっしゃるという意味では、ほんとうに感心いたしました。村山さんと岸上さんにお話しいただいたわけなんですけども、都会といわゆる山村というので、全然違いますけど、も

し坂本さんのほうで、岸上さんにアドバイスしてさしあげることとか、ご質問とかがもしありましたらお願いしたいと思いますが。

【坂本】 いわゆる街道を利用した何かのイベントという点で、僕はここで行われておりますジャズを利用したイベントですね、これなんか、すばらしいなというふうに思っているんですが、本宮町でやっております古道を使ったイベントの中に、いわゆる昔の例に倣って、かごきレースなんていう、かごを使って、担ぐ人、乗せる人という形で組をこしらえて、ある距離を移動すると。その間に幾つかの設問を設けて、それを全部何しながらやっていくというような、おもしろいことを企画して、それが年々多くの方が参加してくれるというような形になっているようです。

そういうふうな1つの、地域の人全体でそういうことを考えて、こんなことをやっていこうという形をしていただくことが町おこしにつながっていったおののかなというふうに思っているんですがね。

【井戸】 ありがとうございます。

岸上さん、1つ質問ですけど、岸上さんのほうでは歴史の発掘とか、語り部とか、そういう方面では、何か工夫されていることとかあるんですか。

【岸上】 努力しているというよりも、わりに今、枚方というのは、そういう歴史的なブームなんですね。我々の枚方宿だけではなくに、樟葉のほうなんかでも、継体天皇のことでかなり興味が高まってきています。そのほかの地域にでも、その地域に非常に密着した歴史的な掘り起こしというのは現在行われています。

今、語り部の話が出ましたけども、我々枚方宿の中でも、先ほどお話しした、江戸時代の古文書がいろいろ出てきているんですよ。その中の一つ一つを探ってみると、非常におもしろい。我々はそういう話を聞く機会が結構あったので、例えば宿場町で紀州の殿様が来られたときに、どういう食事をとられていたのやろうと。そうしたらしっかりと古文書に載っているんですね、記録が残っているんですよ。今回来られた殿様が食べられたのは何々と何々と。また反対に、そのおつきの方が、その殿様のうちをチェックされて、その日の健康具合を、きょうは非常に健康であるとか、そういうこともすべて古文書に残っているんですよ。

だから、今、枚方市にも、そういうことを調べている先生もおられますので、我々としたら、先ほど神坂先生も言うてはりましたように、江戸時代の古文書というのは非常におもしろいんですよ。だから、それを反対に発掘して、皆さん方に提供して、我々の枚方宿の歴史というものを楽しんでいただければなというふうに考えております。

【井戸】 ありがとうございます。

それでは、2巡目の最後ですが、朝廣さんのほうにお願いしたいと思います。

朝廣さんのところのイベントはほんとうにすごくて、70万人の人を呼んでいらっしゃる。これは観光効果、集客効果を含めて、いろんな意味で大成功のイベントと言えそうですけども、そういうものの裏話とかも含めて、工夫されている点を教えていただきたいと思います。

【朝廣】 奈良はうらやましいな、いろんなものがたくさんあってとよく言われるんですけども、先ほども少しお話ししましたように、100年、200年続いて当たり前、お水取りなんかは、今年で1,255回続いているわけですから、その中で新しい事業をいかに立ち上げるかということと、それから、やっぱり社寺が多いので、どうしても高齢者のイメージがあって、その立ち上げのころというのは、若者が奈良でご飯もたべないような状況だったんですね。

じゃ、まちの人たちがいかに興味をもって祭りに参加してもらおうかというようなことと、そういう悩みの中で、それをどう解決していこうかなど。もう1つは、奈良祭をやったうまくいかなかったのが、青年団体だけでやっていたというところで、結局市民の方は一歩下がったところで参加してもらっていたので、その辺の問題もクリアするために、まず運営を、だれでも入っていただける会にして、1年目から、4会場で6,000個をつけよう、10日間やろうということで、それを市民の皆さんに手伝っていただくことにしました。

その運営の仕方なんですけれども、当日サポーター、会員の方以外に、期間中10日間お手伝



いいただく方を募集しまして、5時にこういうふうに受け付けをします。その後、こういうポリプロピレンでできた燈花会オリジナルのカップをつくっているんですが、そこに3センチくらい水を入れます。

これ、シカが手伝っているわけじゃないんです。(笑)シカは水を飲んで、入れたそばから倒していくんです。時間が来たら、ろうそくを入れて火をつけると。

そして、当日サポーターの皆さんには、消灯時間になったら、また火を消しに戻ってきていただきまして、全部片づけて、何も無い状態にして1日が終わるということを毎年やっているんですね。

カップに水を入れて、チャッカマンで火をつけて、また片づけてというような非常に単純な作業なんですけれども、つけている、すぐ横に観光客の皆さんがいらっしゃるの、やっているすぐ横で、皆さんたちが「きれいですね」とか「来てよかった」とか、「ボランティアの皆さんがされているんですね、びっくりしました」、「ありがとう」という言葉をかけてくださる。そうすると、やっぱり人間ってうれしいじゃないですか。それに、自分は1日サポーターをしに来たのに、何か自分がこの祭をやっているんだよという気になってくるんですね、不思議なもので。そういう1人ずつが祭をつくっている当事者なんだという気持ちになっていただけるというところが、広がってきたポイントかなというふうに思うんです。

【井戸】 これは、火の数はどのくらいあって、1日のボランティアはどれくらいいらっしゃるんですか。

【朝廣】 1年目が、10日間で800人ぐらいで非常に大変だったんですけど、そのときは6,000個ですね。今は1日1万2,000から1万5,000個をつけて、300人ぐらいですね。

当日サポーターも、今は半数以上が奈良市外の方なんです。さらに数%は県外の方で、中には観光を兼ねてボランティアをしに来るとい、参加型の観光にもなっているというところがいいのかなと。

それと、やってみたら、若い人たちが非常に参加してくださって、これでさらに何万个も火をつけて、ろうそくなんかを並べて、ますますしんきくさいんじゃないかと、最初の立ち上げのときに心配したりしていたんですけども、若者のカップルが浴衣を着てやってきてくださると。また、当日サポーターも簡単にできるので、こういう子供たち、幼児から高齢者まで、非常に世代間が幅広くご参加いただいて、その辺で、燈花会をまず市民の皆さんで盛り上げていただくというところはクリアできたかなと。

それと、もう1つ巻き込む課題だったのが、やっぱり地元です。周辺の社寺であったり、地元商店街というのは、最初は何を一体するんだろうというような遠巻きに見ておられるところがありましたし、実際に観光客がどんどん来ていただいても、商店街は7時半に閉めちゃうんですね。毎年お願いに上がるんですけども、それでも、要するに若い後継者がいなくて、うちは年寄りだけでやっているからそんなに遅くまでできないとか、あけていてもお客さんが来ないからもうからないとか、そんなことで、最初はそれがすごく大変だったのと、それから、周辺社寺からも、100年以上続く伝統行事と燈花会を同じ時期にするというのはどうなのかというようなご意見もいただいたりして、その辺、厳しかったんです。

でも、ずっとお願いしてやっているうちに、奈良町という自治会地域に、ちょっと古い町並みのところがあるんですけども、その自治会の皆さんたちが、自分たちも自治会単位で一緒にやりますよということでやってくださるようになって、その後に、今度は東大寺さんが、じゃ、燈花会の期間の2日間、夜間拝観をうちも実施しましょうと。興福寺さんもそうなっていて、5年目には東大寺、春日大社、興福寺さん、その3つの世界遺産の社寺を会場にすることができたということで、今は周辺の商店街等も協力をしていただけるようになって、一緒にライトアップとかをしていただいています。

【井戸】 ありがとうございます。

済みません、今、ちょうど本来の終了時間の5時半になりましたけども、非常におもしろいお



話を聞いておりますので、もう1巡、最後に皆さん一言ずつお話しただきたいと思っておりますが、先ほどの朝廣さんのお話に対して何かご質問ありましたらお願いしたいと思います。

岸上さん、いかがですか。

【岸上】 朝廣さんにお聞きしたいんですけども、よく私は、まちづくりをされている方々にいろいろ教えてもらっているんですけども、まちづくりは間違いなく人づくりですよと、これから我々の後に続く後継者をどんどん育てていくことがまず大切ですと。それから、もう1つ言われるのは、まちづくりは、ちょっと汚い言葉かもしれませんが、よそ者とばか者が絶対必要やと言われるんですよ。

ばか者というのは、それだけ熱中する人が必要ですよと、仕事をほっぽり出してでもまちづくりに一生懸命になるような、そういう人が必要ですよと。よそ者というのは、早う言うたら、地域の方だけでやっているまちづくりは、どうしても偏りがあると。だから、よそから来た人にこそ参加してもらわないかんのやというふうに聞いたんですよ。

失礼なんですけど、朝廣さんの場合は、生まれ育ちが奈良というわけじゃないですよ。その辺で何か苦労されたこととかあったら、お聞きしたいと思います。

【朝廣】 私はその、よそ者でばか者でありますので。(笑)

でも、皆さんも多分そうだと思うんですけど、自分の地元に住んでいると、なかなか、じゃ、地元を見直そうかというのは難しいと思うんですよ。私は岡山の倉敷からお嫁に来たんですが、だから奈良って、こんな世界遺産のある そのときはまだ世界遺産登録はされていなかったんですけども、修学旅行でしか来たことのないところに日常的に通えるなんて、お水取りなんて毎日見に行けるわけですよ。東京の、好きな方からすると、すごい魅力だと思うんですが、そんな幸せなことはないなと。だから、奈良でまちづくりをすることは私にとっては、すごい崇高なことと自分で言ったら失礼ですけど、すごいすてきなことで、やっぱり地域の方じゃない、よそ者の風、よそ者の目というのは客観的に見ることができるし、いいものばかり探そうと思うから、絶対に耳を傾けるべきじゃないかなと思います。ばか者は皆さんもご一緒だと思いますけれども。(笑)

【井戸】 ありがとうございます。

それでは、最後のご発言をいただきたいと思っております。

予定をオーバーしておりますので、最後、全部で10分ぐらいのイメージでお話をいただきたいと思っておりますけれども、今まで、これまでのご活動、あるいはご苦労された点、工夫されている点をご紹介をいただきましたけれども、最後には大きなご提案あるいはきょうの感想、または今後の夢、そんなことについて一言ずつ語っていただきたいと思っております。

きょうの第2部に出られた下津DHCクラブのお話で、ドリーム、ホープ、チャレンジとありましたが、ドリーム、ホープ、チャレンジ、いずれについても結構でございますので、一言ずつ最後にご発言をいただきたいと思っております。

まず、岸上さんのほうから、よろしいですか。

【岸上】 私は、そんなに大した夢とかということはありません。ただ、今までやってきたまちづくりを、今まではどちらかという町屋等の修景の補助とか、そういうふうな、わりに地味な活動をやってきたんです。イベントなんかも、とりあえず人に来てほしいという形でやってまいりました。今後は、まち自身が活性化するような、そういう方法を考えていきたいと思っております。

我々のほうでは、町おこし部会という形でまちの活性化に、今、取り組んでおります。今後我々が一番力を入れていきたいのは、町屋情報バンクというのを4月1日に設立いたしまして、これはまちを活性化するというので、先ほども説明しましたように、地域で空き地になってしまったり、すばらしい町屋やねんけども、何も使用していないというようなのが結構あるんです。

これは、置いておくのはもったいない、やる気のある若い人とか、あるいは枚方市以外、大阪に住んでいる方や京都に住んでいる方でも、何か自分の得意なこと、あるいはみんなと一緒にやってみたいこと、例えば陶芸をやってみたい、あるいは美術館を開いてみたい、いろんな夢をお持ちだと思うんですよ。それをこの枚方宿へ持ってきたらどうかなと。地域の皆さんと一緒にそれを楽しんだらどうかなということで立ち上げたのが、この町屋情報バンクなんです。できるだけ早い間に、その辺の情報をしっかりとってマッチングといいますか、結びつけていきたいなというふうに考えております。

今後の協議会活動の中で、我々はいろいろと話をさせてもらったんですけども、課題として一番頭にありますのは、我々の活動の中で高齢化が進んできたということなんですね。先ほどの、人づくりが非常に大切やということと同じで、我々の年代だけで固まって活動するというのは、やはり限界があります。新しい考え方やエネルギーを次の世代の若い人たち、これに我々は期待いたします。そういう形で、この町屋情報バンクなんかでも、どんどん若い人がこの枚方宿のほうに参加していただきたいと考えております。

我々のほうとしたり、今グランドプランというのを枚方宿の中でつくっています。このグランドプランというのは、先ほど言いましたように商業の活性化も含めて、まち全体が明るい、住みよい、また住んだ人が誇りに思えるようなまちづくり、これを進めていきたいというふうに思っております。したがって、ジャズやいろんなアトリエをつくったり、大人塾、健康宿、いろんなことがありますけども、この中でとりあえず枚方宿を楽しんでもらおうやないかということを中心に、今後とも進めていきたいと思っております。

4月1日、もし皆様方に興味がございましたら、ぜひ枚方の鍵屋のほうに足をお運びください。皆さん方と色々な話をして、また枚方宿で何か皆さんと一緒に楽しめるような機会を必ずつけていきたいと思っております。

どうもありがとうございました。

【井戸】 ありがとうございます。

それでは、次に坂本さん、お願いできますか。

【坂本】 自分たち、今、夢のような話なんですけれども、実は、^{さんげいみち}参詣道として熊野川が世界遺産になっているわけですね。この川を利用して、船でもって古道を体験するという、そういうふうなことをやりたいなと思っているわけなんです。

本宮の旧社地の前から新宮の速玉大社の前までが世界遺産になっているわけなんです。今、熊野川町から新宮市までは船での下りができておるんですが、本宮町のほうは悲しいかな、上に発電所がたくさんありまして、ダムが5つも6つもあるわけなんです。それで、川がせきとめられてしまって、水がないんですよ。ほんとうに死んだような川になっておるんですが、これを、もう間もなくだと思っておりますけれども、毎日9トンぐらいの水が流されるんですが、それだけではなかなか船下りができないということで、あと3トンなり4トンなりを流していただいて、そして船下りができるようなことを実現したいというのが今のところ、私たちの夢で、働きかけを行っております。

それからもう1点、世界遺産になっております古道は、実は大昔から、京都から始まって那智までの片道全長約330キロメートルなんです。これが^{さんげい}参詣の道としてあったわけなんです。そのうちで現在世界遺産になっているのは、滝尻王子から那智までの間、約80キロメートルぐらい、4分の1ぐらいがそれになっているわけなんです。そのうちでも、舗装されている道は古道としては世界遺産になっていないわけなんです。本来、一連であるべきはずの道が、途切れ途切れで世界遺産になっているという点、これがどうも残念でたまらないわけなんです。そこらあたりが何とかならないのかなということ、これを自分たちも常に考えておまして、できるだけ、それらも含めて世界遺産にしてほしいなというふうなことを考えております。

【井戸】 ありがとうございます。

川の古道、それから、一連の道としての古道ということでお話をいただきました。

では3番目、朝廣さん、お願いできますか。

【朝廣】 やっぱり、当面の奈良の課題、平城遷都1300年に向けての県下のまちづくりをやっている拠点、拠点の人たち、あるいはそのやっていることを、どうネットワーク化していくかというようなことと、それを支える人づくりですが、県で2010年塾というのをやっまして、2010年に活躍していただける文化ボランティアを養成しようと。私もその運営にかかわらせていただいているんですが、それは手法というよりも、それを通して、どんな奈良にして、どういうおもてなしをしたいか、そういうことを一緒に考えながら、思いを同じにする人たちをどうつくっていくかということだと思っております。

ただし、1300年というのは目的ではなく、もっと言えば、観光客を呼び込むということも目的ではない。それはやっぱり手段であって、それを機に、いかに魅力的な奈良をみんなで作っていくかということで、そういうことが観光にも結びついていくんじゃないかなと思っております。

そして、きょう私はここへ来ながら、奈良の街道のことをほとんどお話しできなかったんですけれども、奈良の街道については、ここにいらっしゃる皆さんのほうが随分お詳しいと思いますので、地元の人が街道の魅力をつくっていくのも、もちろん大事なんですけども、だれがつくって悪いことはないし、ぜひ、奈良のここが好き、古道のここが好きという方がいらっしゃったら、どんどんかかわっていただければうれしいなと思っています。

ありがとうございます。

【井戸】 ありがとうございます。

それでは、最後、大トリでございます。村山さん、一言お願いいたします。

【村山】 最後は感想と提案ということですが、ちょっとこの際、言わせていただきたいんですが、やはり日本の観光地のまちづくり発想に私、ちょっと異議を持っております。そのことについて、お話しさせていただきます。

ここに書いてありますように、日本の場合、観光施設に依存し過ぎて、観光振興で忘れていることがあるということなんです。それはどういうことかという、人が集まる観光拠点を、人々の「感幸拠点」に高め、あるいは町中のオアシスにする、そういう仕掛けとかもてなしの演出、シナリオが日本の場合、欠如していると思います。別の言葉で言うと、見せる努力は一生懸命しておりますけれども、もてなす努力がやはり二次的になっているというふうに思います。

ですから、「感幸拠点」をどうして育てていくかということがあまりテーマになっていない。ドイツのローテンプルグに行きますと、こういう有名な言葉があります。「歩み入る者にほほえみを、去り行く者に幸せを」という、皆様もご存じだと思いますが、この有名な言葉がそれを物語っているわけでありまして。

これはアメリカの事例でございますが、街道というのは常に人々が出会う道であるという、そういう街道ですね。それから、もう1つは、人々が気持ちよく暮らせる場である、快い道と書いて「快道」でありますけれども、もともと、自動車道路を市民のオアシス街路にした事例が次のスライドであります。

こちらは完全に自動車道路だったわけでありまして。その後をこのように、市民のためのオアシスとしての街路にしているということですね。これはアメリカのボルダーというところにありますが、有名ですね。街道拠点に遊歩街区という、要するにアメリカではランプリングと言っていますが、そういうパールボールストリートとして、これはアメリカ中で有名になっておりまして、その結果、アメリカで有名なお店が全部この場に集まってくるというような現象さえも起きております。

街路というのは、やはり町中の生活舞台なわけですね、ライブステージなわけですね。街路にもっと人間の息吹を取り戻して、生活の楽しさを取り戻すと。そのために、生活舞台として道をどう育てるかというような発想が、やはりないように思います。これはやっぱり、日本の場合は道路交通法上の規制がありまして、そう簡単にできませんけれども、社会実験的に今、各地でこれに近いことが行われつつあるわけでありまして。

必要なことは、社会ニーズに合わせて道路の使い方を考えるべきであると思います。ハードの面では道路構造令が既に改正されて、人の歩く道を同じように扱うという1つの構造令が既にでき上がっておりますけれども、使い方の点では大きな規制がまだ残っております。

これは有名なパリのシャンゼリゼ通りですけれども、シャンゼリゼに人が集まるのは、凱旋門を見るために来ているのではなくて、遊歩かいわいの居心地とか歩き心地を楽しむために人々が集まってきているわけです。楽しいまちというのは、この遊歩者、フランス語ではフラヌールと言いますが、そういうものがまちの主役になってつくられているということでもあります。

大きい発想の転換として必要なことは、まちというのは大きな家であると考えられるべきであると思います。そうすると、あらゆるまちのパーツは全部、家の中のパーツと全く同じようになぞらえることができます。まちというのは我が家というふうに考えてまいりますと、自分は当事者であり、そして何らかの責任を果たさなきゃならないという発想に変わるわけでありまして。

これはリヨンの、ある町筋でございますけれども、これはごらんとおり、完全に人々の居間、茶の間、そしてリビングルームになっているわけですね。これは特殊な例ではありませんで、ヨーロッパ中どこでもこういった風景が見られるわけでありまして。

町中のまちづくりに欠けている1つの発想として、まち使いという発想が最初にあるべきなんです。だから、まずどのようにまちを使うのかという発想があって、その結果まちをどうつく

るかという、その方法がやはり逆転しております。

まちというのは、つくるから活性化するのではなくて、使うから活性化するわけであり、言うまでもありません。だから、まちづくりの前にまち使いを考える。まちをどうつくるかよりも、町中をどう使うか、どう生かすかということを考えて上で、最後に何をつくるかという話が出てくるんですね。それが、やっぱり逆転しております。

タウンライフ、ストリートライフと言ってもいいんですが、そういうときにアーバンドラマ、町中でいるんな生活を展開する。そして、まちをどう使いたいか、そのときのシナリオをそれぞれ想定する。それを考えないで、いきなり都市の大道具、小道具を先に使ってしまうというのが日本の場合のまちづくりであります。舞台の使われ方がわからないのに、最初から小道具をいっぱいつくって、さてこれをどう使うか、どう活性化するかというのが日本の現状のようでもあります。

これは全く逆でありまして、自分たちがこのまちをどのように生かして使うかということが議論されないと、ここに橋をつくって、公園をつくって、ここに道を整備してということが先に立ってしまう。その結果、箱物づくりと言われるような批判が起きてくるわけであります。

まちを使うということは、既にあるものを生かすということですから、お金をあまり使う必要はないわけです。全く使われないままで放置されているもの、それを生かすという努力がやはり欠けていると思います。

もう1つ、最後でございます。これはちょっと大き過ぎる話で申しわけないんですが、これはご存じ、近畿圏のいわゆる多角・広視覚の構造をあらわされているものですが、ここで近畿圏街道連携軸を丸ごと会場とする、近畿観光もてなし博覧会をと。ですから、新しい場所に博覧会をやるのではなくて、要するに、近畿全体が人々に幸せになっていただくもてなしをサービスする、それを博覧会とする、そういった博覧会というのがあってもいいのではないかと。

実は、これに似たことをやろうとしているのが、長崎さるく博であります。長崎で、まち全体を博覧会にしているということで、私は物見せ観光の発想ではなくて、もてなし「感幸」。物を見せることばかりの観光ではなくて、やはり人々の心にアピールする、もてなし「感幸」という、その新しい発想へ転換しないと、常に新しいものをつくっていかなきゃならない。どこかをいつも、何か、作り出さなきゃ観光にならないと思ってしまうわけですね。ですから、まず人々にどのようなもてなしを出すか。これは、四国のお接待というのがそれをあらわしているわけですが、それが観光の中心として発想転換をする必要があると思います。

最後に一言だけ申し上げますと、もう街道の時代は終わったと思っている人が多いんですね。私はこれから街道の時代が始まると思っています。街道こそ、それが持っている役割、その復活こそが日本の都市を活性化し、地域を元気づける一番の鍵だろうと私は思っています。だから、街道をもう一度古い時代の遺物としてではなくて、これからの、未来の遺産へ向けて、これをどう使うかという形の発想に切りかえるべきであろうというふうに思います。

ちょっと、最後に偉そうなことを申し上げました。

【井戸】 ありがとうございます。

10分おくれで始まったシンポジウムでございますが、このパネルディスカッションでさらに10分押しまして、私はみずからイエローカードを出さなければいけないと思っております。

一言だけ、まとめさせていただきたいと思っております。

きょう、朝廣さんのほうからで、特に印象に残りましたのは、周りの人あるいは地域の人、若い人を含めて、どんなふうに巻き込んでいくのかというお話でした。

また、岸上さんのほうは、ご謙遜されながらも、ほんとうに都会の中で多くの方に参加をさせていただいて、ジャズあるいは寄席、菊花展、そして町屋情報バンクと、いろんな試みをされている。

また、坂本さんのほうは、ほんとうにしにせらしく、また世界遺産の場所らしく、研修に、あるいは奉仕活動による保全等々に力を入れていらっしゃる。また、将来は川の古道、あるいは一連の道としての熊野古道ということを見つけていらっしゃるということでございます。

そして村山さんのほうからは、2つのE、3つのSという分析に始まり、見せる努力よりも、もてなす努力、また



近畿圏を「感幸圏」として、幸せを感じる圏として、博覧会みたいなことも考えてはどうかという非常に夢のあるご提案をいただいたということでございます。

きょう、1日を通して、神坂先生のお話、また各団体のご発表、そしてパネルディスカッション、いろんな方々のご意見がここに寄せられましたけれども、ほんとうに、こういう方々のお取り組みがこれまでの関西、近畿を支えてきたし、またこれからも大きな原動力になっていくんだなということを強く感じました。それが、このシンポジウムのテーマであります、街道から始まるまちづくりに向かっていく1つの原動力、将来は非常に明るいなという感じを持ちました。

また、きょうがスタートで、こういう各団体、各地域の交流が進み、よりすばらしい関西圏、また日本という国がよりすばらしいものになることを祈念いたしまして、パネルディスカッションのほうは終了させていただきます。どうもありがとうございました。

～終了～

街道の子守唄

岩井 ゆき子



【司会】 岩井ゆき子さんによる街道の子守歌「天満の市」を披露させていただきます。

【岩井】 どうも、皆さんこんにちは。

きょうは街道交流シンポジウムに参加して、子守歌を皆さんに聞いていただこうと思いましたが、着物でやってまいりました。どうぞよろしくお願いいいたします。

大阪のまち、古くは水の都と言われました。そして、大阪のまちの中心地、中之島の天満橋、そのすぐ近くにあります八軒家、そこは古来から熊野古道の出発点でした。そして、大阪、京都の人々が行き交う地点でもありました。その天満橋のたもとに大きな市場がありまして、それは江戸時代のことです。その市場でいろんな青物が運ばれて、そしていろんな人たちが行き交いました。その様子を歌にした、大阪の子守歌があります。

大阪の「天満の市」。私自身はこの子守歌を初めて聞いたときに、私の生まれたこの地にこんなにすてきな子守歌があったのかと思いました。子守唄は聞いていると、何となく口ずさめるものです。親から子へ、そして子から孫へと受け継がれていく子守歌はそんなものだろうと思います。この大阪の子守歌、全国の子守歌もそうですけれど、まだまだたくさんの方が子供たちに、そしてお孫さんに歌っていらっしゃると思います。

こんなことを言われた方がいらっしゃいました。子供に歌った子守歌、今は年をとって、この年になったら、この子守歌、自分自身のために歌っていますと。

日本の子守歌は街道とともに、そんなふうにして受け継がれていくんだろうと思います。

じゃ、みなさんと一緒に歌いましょう。大阪の子守歌「天満の市」です。

ねんねころいち 天満の市で 大根そろえて ふねにつむ
ふねにつんだら どこまでゆきやる 木津や難波のはしのした
はしのしたには かもめがいやる かもめとりたや 竹ほしや
竹がほしけりゃ 竹やへござれ 竹はゆらゆら ゆらのすけ

どうもありがとうございました。



閉会挨拶

大阪府 土木部長 丸岡 耕平



【司会】 どうもありがとうございました。

それでは、ここでシンポジウムの閉会に当たり、当講演会の主催者であります大阪府土木部長、丸岡耕平より閉会のあいさつを申し上げます。

それでは、丸岡部長、よろしく願いいたします。

【丸岡】 今紹介をいただきました、大阪府の土木部長の丸岡でございます。

本日は長時間にわたり、最後まで熱心に耳を傾けていただきましてありがとうございます。きょうは、また、お休みの中この会場いっぱい、このようにたくさん参加いただきまして、重ねて御礼申し上げたいと思います。

お恥ずかしながら、実は、私も聞いていて、いろいろと勉強になったなという気持ちでございます。2つほど例を挙げますと、東海道57次。え？ 53違うのと。京街道の4つの宿場があったということでございます。それから竹内街道、これが日本の最古の国道、すなわち一番古い国道1号線でございます。こういうこともございました。

やっぱり、街道というのは単純に地域と地域を結ぶ道路だけじゃなくて、やはり昔から今へ、今から未来へと、これをつなげる生活の舞台であったと。これがすなわち歴史的な遺産になっているのかなと、こういう気がいたします。

この歴史的遺産、非常に大事だという中で、先ほどの各パネラーの皆さん、それから各団体の活動報告、そして入り口にパネルがございました。皆さん、一生懸命その活動をやっていただいていると。よく考えると、確かに街道の中には宝物が埋まっているわけですね。この宝物を、皆さん一生懸命になって掘り出そうと、発掘しようという活動がほんとうに身にしみまして、感謝申し上げたいと思います。ほんとうに頑張っているなという中で、行政も行政なりに、役割分担の中で皆さんとしっかりと手を携えて頑張っていきたいなと。

やはり、いろいろと宝物を発掘し、それを広げていく。すると、皆さんがいろんなところから集まってくる、そして、それがにぎやかになる、地域が活性化していく、大阪がよくなる、関西がよくなる、日本がよくなると、いい方向に発展していくんじゃないかなという気がいたします。今後とも、しっかりと力を合わせて頑張っていきましょう。

最後になりますけれども、今回のシンポジウム開催に当たりましてご支援いただきました国土交通省並びに関係者の皆さんに御礼を申し上げまして、閉会のごあいさつとさせていただきます。

ありがとうございました。

【司会】 ありがとうございました。

それでは、以上をもちまして「むすぶ道、であう道 - 街道交流シンポジウム」を終了させていただきます。

会場の皆様、長時間にわたり、ほんとうにありがとうございました。

皆様方には、お忘れ物などなきようにお気をつけてお帰りくださいませ。また、受付にてお配りいたしました封筒に入っておりましたアンケート、こちらのぼうも、お帰りの間にぜひご記入いただき、受付付近の回収箱にお入れください。皆様のご協力をお願いいたします。

それでは皆様、本日はまことにありがとうございました。

終了

2-2 イベントにおけるマップの活用

2-2-1 街道マップ作成をととしたネットワークづくり

地域の歴史や文化を体験しながら街道を歩くためにはマップが必要である。正確でわかりやすいマップをつくるためには、街道がとおる地域からの正確で詳細な情報が不可欠である。街道ウォーキングイベントに向けて「近畿街道・交流拠点ネットワーク推進会議」で、マップを作成した。

街道ごとのマップを「近畿街道・交流拠点ネットワーク推進会議」の構成団体で作成していくことで、地域から正確な情報を得るだけでなく、各団体が力を結集したことによる地域間の連携が生まれる。案内マップの作成に当たっては、以下の役割分担のもとに行った。街道が位置する自治体は地図の確認、写真の提供を担当した。街道を中心に活動しているNPO団体は街道沿道の史跡名勝案内や伝統産業、休憩所やトイレの所在地などの情報提供を担当した。それぞれの専門分野からの情報提供により、きめ細かな情報を盛り込み街道歩きに役立つ案内マップとした。

1) マップの作成対象範囲

- A. 竹内街道（大阪府堺市～奈良県葛城市）
- B. 熊野街道（大阪府大阪市～和歌山県和歌山市）
- C. 京街道・西国街道
 - 京街道（大阪府大阪市～京都府八幡市～滋賀県大津市）
 - 西国街道（兵庫県神戸市～大阪府茨木市～京都府京都市）

2) イベントにおけるマップの活用

- 1. 竹内街道ウォークイベント
平成17年12月10日（土）
- 2. 熊野街道ウォークイベント
平成17年12月11日（日）
- 3. 街道交流シンポジウム
平成18年2月11日（土）

2-2-2 竹内街道マップ作成をととしたネットワークづくり

(1) NPO 法人ゴダイとの連携

竹内街道マップの作成においては、NPO 法人ゴダイと連携した。

NPO 法人ゴダイは、「いきいき長寿社会実現のお手伝い」として、竹内街道史跡めぐりウォークを継続的に開催することにより、歴史好きで元気な高齢者の健康増進といきがいくりに取り組んでいる。

< 情報提供項目 >

- ・竹内街道のルートの特定。
- ・NPO 法人ゴダイが推奨するルートの選定。
- ・街道沿いの名所、旧跡を紹介したコラムの選定。
- ・コラムの内容を検討。
- ・わかりにくいため、詳細図が必要となる箇所を選定。
- ・パンフレットなど資料の提供。
 - 「竹の内街道を歩こう」「歴史のまちを歩こう」「GO!南河内」
 - 「太子町イラストマップ」「ガイドマップ松原市」「羽曳野」
 - 「近つ飛鳥の里 太子 歴史探訪マップ」「羽曳野の文化遺産」



NPO 法人ゴダイが制作したパンフレット

- ・ 歩行距離、標準歩行時間、標準所要時間。
- ・ 道標、コンビニエンスストア、スーパー、トイレ、休憩所などの場所。



NPO 法人ゴダイ

(2) 竹内歴史資料館との連携

竹内街道に特化した資料館なので、その資料は豊富で正確。用語、時代背景などを確認した。

<所在地>

〒583-0992 大阪府南河内郡太子町大字山田1855番地

太子町立竹内街道歴史資料館 TEL 0721-98-3266 FAX 0721-98-3279



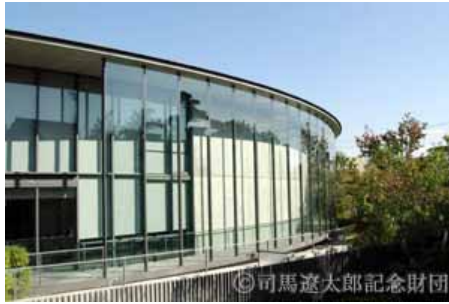
竹内歴史資料館

(3) 司馬遼太郎記念館との連携

作家・司馬遼太郎氏は竹内街道を幼いころよく訪れていた。紀行シリーズ「街道をゆく」のなかで「竹内峠の山麓は故郷のようなもの」との記述もある。

<パンフレットの中で>

作家・司馬遼太郎氏と竹内街道のかかわり、菜の花忌などを紹介した。



司馬遼太郎記念館

(4) 大阪府庁による資料提供

竹内街道は大阪府から奈良県へと続く。大阪府エリアにおける街道のルート、エッセイなどについて地図情報、資料、写真を提供。

大阪府の担当・・・大阪府交通道路室道路整備課交通計画グループ

< 資料提供 >

- ・資料・・・大阪府教育委員会調査による、竹内街道の基本的なルート、史跡、沿道情報。教育委員会による「歴史の道調査報告書」を竹内街道の基本的なルートとする。
- ・写真・・・大阪府の土木事務所、大阪府内の市町村などに依頼して、写真を入手。

(5) 奈良県庁による資料提供

竹内街道は大阪府から奈良県へと続く。奈良県エリアにおける街道のルート、エッセイなどについて地図情報、資料、写真を提供。

奈良県の担当・・・奈良県土木部道路建設課企画調整グループ

< 資料提供 >

- ・資料・・・歴史国道「竹内街道 竹内峠」について
- ・写真・・・歴史国道「竹内街道 竹内峠」など
- ・歴史国道として「竹内峠」周辺を整備していることをアピールする。

(6) 市町村との連携

竹内街道がとおる市町村より、情報提供、写真提供。

< 写真提供 >

- ・堺市・・・仁徳天皇陵、大泉緑地、堺刃物など。
- ・羽曳野市・・・日本武尊白鳥陵、河内木綿など。

(7) 電鉄会社（近畿日本鉄道、南海電鉄）による資料提供

竹内街道にそって近畿日本鉄道、南海電鉄がはしっている。地図を作製する際に、線路に他の情報がかからないようにレイアウトを工夫。パンフレット1見開きが一日に歩くコースに適していることから、各ページのスタート駅と終点駅からターミナルまでの電鉄情報を掲載。電鉄を利用して現地へ行きやすく案内する。

- ・近畿日本鉄道、南海電鉄より、駅名、路線図、走行時間、沿道情報を提供。

2-2-3 熊野街道マップ作成をとおしたネットワークづくり

(1) 大阪府庁の担当

熊野街道は大阪府から和歌山県へと続く。大阪府エリアにおける街道のルート、エッセイなどについて地図情報、資料、写真を提供。

大阪府の担当・・・大阪府交通道路室道路整備課 交通計画グループ

< 資料提供 >

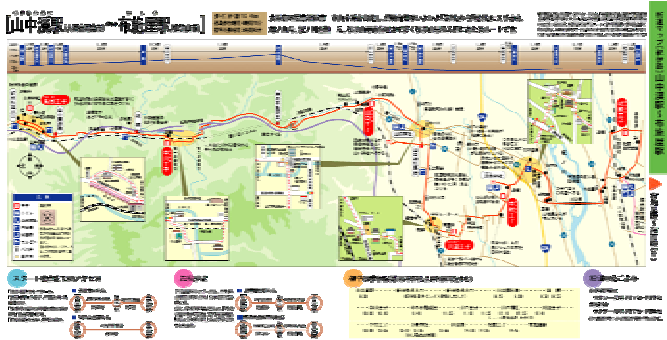
- ・資料・・・大阪府教育委員会調査による、熊野街道の基本的なルート、史跡、沿道情報。教育委員会による「歴史の道調査報告書」を熊野街道の基本的なルートとする。
- ・写真・・・大阪府の土木事務所、大阪府内の市町村などに依頼して、写真を入手。大阪府内の王子に関しては大阪府庁富田林土木事務所などで撮影を担当。

(2) 和歌山県の担当

熊野街道は大阪府から和歌山県へと続く。和歌山県ではすでに和歌山県内の「和歌山県街道マップ 熊野古道」をエリア別に作成していたので、このパンフレットとの連携を図る。

和歌山県のウォーキングマップとの連携

編集内容、デザインとも「和歌山県街道マップ 熊野古道」にそえることを大阪府、和歌山県とともに決定。これによって街道歩きをする人たちが、大阪の八軒家から和歌山の熊野三山までとれることなく熊野古道ウォーキングマップを活用することができる。



和歌山県制作の
「和歌山県街道マップ 熊野古道」

和歌山県の担当・・・和歌山県県土整備部道路局 道路政策課

- ・資料・・・和歌山県エリアにおける街道のルート、エッセイなどについて地図情報、資料を提供。
- ・写真・・・和歌山県庁広報室フォトライブラリーより和歌山県内の王子の写真（中山王子）。

(3) 市町村との連携

熊野街道沿いの市町村より、情報提供、写真提供。

- ・堺市・・・仁徳天皇陵、てくてくロード、大鳥大社など。
- ・岸和田市・・・だんじりなど。
- ・泉南市・・・林昌寺、海会寺跡など。
- ・阪南市・・・山中関所跡、山中溪の桜、馬目王子。



林昌寺（泉南市）



山中溪の桜（阪南市）

(4) 電鉄会社（南海電鉄、近畿日本鉄道、京阪電鉄）の担当

熊野街道周辺に南海電鉄、近畿日本鉄道、京阪電車がはしっている。地図を作製する際に、線路に他の情報がかからないようにレイアウトを工夫。パンフレット1見開きが一日に歩くコースに適していることから、各ページのスタート駅と終点駅からターミナルまでの電鉄情報を掲載。電鉄を利用して現地へ行きやすく案内する。

- ・南海鉄道、近畿日本鉄道、京阪電車より、駅名、路線図、走行時間、沿道情報を提供。

(5) 大田記念美術館との連携

大田記念美術館が所蔵する「浪花名所図会 八けん屋着船之図 歌川広重 画」(1ページ)を掲載する承諾を得る。絵画のポジの貸し出し。

八軒家船着場は、「水の都大阪再生構想」の中心地

現在、八軒家船着場があった天満橋は、「水の都大阪再生構想」の中心地となってる。周辺に船着場、遊歩道などを整備し、かつてのにぎわいを取り戻した観光スポットとして生まれ変わろう

としている。この計画をアピールするためにも、本写真はこのパンフレットにおいて重要な役目を果たしている。



八軒家船着場の跡（天満橋）

（6）街道沿いの名所、旧跡との連携

街道歩きをより楽しむために、街道沿いにある名所、旧跡をコラムで紹介。自社仏閣をはじめとした各施設より掲載許可をもらい、内容確認、写真貸し出しなどを依頼。

<掲載承諾先>

四天王寺、住吉大社、堺市博物館、止止呂比売命神社、大鳥大社、信太森葛葉稻荷神社
正福寺、南近義神社、林昌寺、海会寺跡

<写真貸し出し先>

堺市博物館

2-2-4 京街道マップ作成をとおしたネットワークづくり

（1）3つの府県を結ぶ

大阪府から京都府へつながる京街道をたどり滋賀県へ

京街道は秀吉が大阪城と伏見城を結ぶために築いた文禄堤の道である。守口宿、枚方宿、淀宿、伏見宿の4つの宿からなる。この京街道の4次と徳川幕府が江戸から京都までをつないだ東海道五十三次を合わせて、江戸と大阪を結ぶ東海道五十七と呼ばれている。大阪府、京都府、滋賀県の3府県をつなぎウォーキングマップとした。



文禄堤の跡

（2）大阪府との連携

京街道は大阪府から京都府へと続く。大阪府エリアにおける街道のルート、エッセイなどについて地図情報、資料、写真を提供。

大阪府の担当・・・大阪府交通道路室道路整備課 交通計画グループ

<資料提供>

・資料・・・大阪府教育委員会調査による、京街道の基本的なルート、史跡、沿道情報。教育委員会による「歴史の道調査報告書」を京街道の基本的なルートとする。

・写真・・・大阪府の土木事務所、大阪府内の市町村などに依頼して、写真を入手。

（3）枚方宿との連携

大阪府枚方市にある枚方宿は京街道のなかで最も整備の進んだエリアである。枚方宿まちづく

り協議会、大阪府枚方土木事務所、枚方市役所を中心に、活動が進んでいる。「京街道の主役は枚方宿である」という誇りをもって、地域住民が定期会議を開き協力してまちづくりに取り組む。大阪府枚方土木事務所とは数回打ち合わせをして、枚方宿周辺における街道のルート、イベントなどについて資料を提供。

枚方宿の詳細図(6ページ)は、他よりも拡大サイズでわかりやすくした。



枚方宿

(4) 京都府庁の担当

京街道は大阪府から京都府へと続く。京都府エリアにおける街道のルート、エッセイなどについて地図情報、資料、写真を提供。

京都府の担当・・・京都府土木建築部 道路計画室

< 情報提供 >

・京街道の成り立ちと、東海道を合わせて五十七次ということを確認すること。

1 ページのコピー内容を変更

< 写真提供 >

藤森神社、勸修寺、岩清水八幡宮など



石清水八幡宮

(5) 滋賀県の担当

京都府から滋賀県へと近畿の街道ネットワークは続く。滋賀県エリアにおける街道のルート、エッセイなどについて地図情報、資料、写真を提供。

滋賀県の担当・・・滋賀県土木交通部 道路課

< 写真提供 >

蝉丸神社、車石、逢坂の関など



蝉丸神社



車石

(6) 市町村との連携

京街道沿いの市町村より、情報提供、写真提供。

<写真提供>

- ・ 守口市・・・守口の一里塚、難宗寺、佐太陣屋跡、佐太天神宮
- ・ 寝屋川市・・・茨田堤、鞆呂岐神社寄進の鳥居
- 枚方市・・・万年寺山、渚院跡

(7) 電鉄会社(京阪電鉄、阪急電鉄、近畿日本鉄道)の担当

京街道周辺に京阪電車、阪急電車、近畿日本鉄道がはしっている。特に京阪電車のルートは京街道とのかかわりが深い。地図を作成する際に、線路に他の情報がかからないようにレイアウトを工夫。パンフレット1見開きが一日に歩くコースに適していることから、各ページのスタート駅と終点駅からターミナルまでの電鉄情報を掲載。電鉄を利用して現地へ行きやすく案内する。

- ・ 京阪電鉄、阪急電鉄、近畿日本鉄道より、駅名、路線図、走行時間、沿道情報を提供。



京阪電車



阪急電車

(8) 街道沿いの名所、旧跡との連携

街道歩きをより楽しむために、街道沿いにある名所、旧跡をコラムで紹介。掲載した自社仏閣をはじめとした各施設に、掲載許可をもらい内容確認、写真貸し出しなどを依頼。

<掲載承諾先>

守居神社、野江水神社、難宗寺、盛泉寺、佐太天神宮、光善寺、鞆呂岐神社寄進の鳥居、松花堂庭園、藤森神社、勸修寺、随心院、岩屋神社

<写真貸し出し先>

片楚神社、松花堂庭園

2-2-5 西国街道マップの作成をとおしたネットワークづくり

(1) 兵庫県の担当

西国街道は京の都と西国を結んだ街道である。兵庫県エリアにおける街道のルート、エッセイなど地図情報、資料、写真を提供。兵庫県の担当・・・兵庫県県土整備部土木局道路計画課

<写真提供>

敏馬神社、沢の井、処女塚古墳など。



(2) 大阪府庁の担当

大阪府エリアにおける街道のルート、エッセイなどについて地図情報、資料を提供。

大阪府の担当・・・大阪府交通道路室道路整備課 交通計画グループ

<資料提供>

・資料・・・大阪府教育委員会調査による、西国街道の基本的なルート、史跡、沿道情報。教育委員会による「歴史の道調査報告書」を西国街道の基本的なルートとする。

(3) 京都府庁の担当

京都府エリアにおける街道のルート、エッセイなどについて地図情報、資料を提供。

京都府の担当・・・京都府土木建築部 道路計画室

<写真提供>

妙喜庵、東寺、岩清水八幡宮など

(4) 市町村との連携

西国街道沿いの市町村より、情報提供、写真提供。

<写真提供>

- ・神戸市・・・灘五郷
- ・芦屋市・・・在原業平歌碑、打出天神社、阿保新王塚、金津山古墳
- ・西宮市・・・西宮神社、門戸厄神
- ・伊丹市・・・師直塚、昆陽寺、墨染寺、伊丹廃寺跡
- ・茨木市・・・ぼろ塚、郡山宿
- ・高槻市・・・今城塚古墳、上宮天満宮、磐手杜神社、芥川一里塚、本澄寺
- ・大山崎町・・・水無瀬神社、離宮八幡宮、勝竜寺城公園、宝積寺
- ・長岡京市・・・中山修一記念館、乙訓寺
- ・向日市・・・長岡宮跡、須田家住宅、福田寺
- ・京都市・・・東寺



灘五郷



東寺

(5) 電鉄会社（阪神電鉄、阪急電鉄、近畿日本鉄道）の担当

西国街道周辺に阪神電車、阪急電車、近畿日本鉄道がはしっている。特に京阪電車のルートは西国街道とのかかわりが深い。地図を作成する際に、線路に他の情報がかからないようにレイアウトを工夫。パンフレット1見開きが一日に歩くコースに適していることから、各ページのスタ

ート駅と終点駅からターミナルまでの電鉄情報を掲載。電鉄を利用して現地へ行きやすく案内する。

・阪神電鉄、阪急電鉄、近畿日本鉄道より、駅名、路線図、走行時間、沿道情報を提供。

(6) 街道沿いの名所、旧跡との連携

街道歩きをより楽しむために、街道沿いにある名所、旧跡をコラムで紹介。掲載した自社仏閣をはじめとした各施設に、掲載許可をもらい内容確認、写真貸し出しなどを依頼。

< 掲載承諾先 >

西宮神社、中村八幡宮、本住吉大社、東明八幡神社、打出天神社、門戸厄神、広田神社

昆陽寺、墨染寺、正光寺、瀬川神社、勝尾寺、上宮天満宮、伊勢寺、磐手杜神社

芥川一里塚、本澄寺、水無瀬神社、離宮八幡宮、宝積寺、中山修一記念館、乙訓寺、福田寺東寺妙喜庵

< 写真貸し出し先 >

広田神社

2-3 ウォークイベントの演出

2-3-1 道標の図柄の制作

本道標の制作ポイント

道標は、通過交通のために必要な道案内機能であることに加え、歩行空間としての街道の利用価値の認識を高めてもらうために重要な役割を果たす。このことから、鉄道会社等が主催するウォークイベントにあわせ連携推進母体が設置する手作り案内板や沿道の自動販売機のコマーススペースに貼付し掲示する道標の図柄の制作を行う。

道標の図柄の制作に当たっては、連携推進母体の考案をデザイン化したうえ、印刷、ラミネート加工する。

熊野街道ウォークイベント道標



街道の持つ「悠久」「文化・自然の流れ」を曲線にてイメージした。

竹内街道ウォークイベント道標



街道の持つ「悠久」「文化・自然の流れ」を曲線にてイメージした。

2-3-2 提灯の図柄の制作

本演出の制作ポイント

行く先を照らす提灯は、古来、夜間の街道を安全に通行するために必需品であった。また、そこから街道や地区ごとの案内を兼ねた標識の意味をも兼ねており本業務における街道を案内する目的に一致するため制作した。また、鉄道会社等が主催するウォークイベントにあわせ連携推進母体が認める軒先などに吊るしていただき、イベントを盛り上げるものとした。

熊野街道ウォークイベント提灯



熊野街道のネーム告知やイベントの方向性を打ち出したデザインとした（クリーム色）

竹内街道ウォークイベント提灯



竹内街道のネーム告知やイベントの方向性を打ち出したデザインとした（白色）

2-3-3 “ケータイ・街道ナビゲーション”の実施

情報コンテンツの作成

H17 国土交通省「地域連携支援ソフト事業」において、近畿6府県・鉄道会社・協力団体で構成される「近畿街道・交流拠点ネットワーク推進会議」を設立し、「近畿街道・交流拠点ネットワーク推進会議」では、近畿の貴重な資源である「街道」を活かした観光振興や交流促進の一環として、携帯電話とQRコードを活用した「街道ナビゲーション」を試行的に実施した。

情報コンテンツは以下の3コンテンツを各自治体と連携し作成を行った。

街道界隈の情報案内

竹内街道・熊野街道・京街道に関する街道界隈の史跡・名勝などの情報を紹介。

各、自治体に見どころ等の情報や、掲載の写真を用意していただき、情報を取りまとめ、コンテンツの作成を行った。

ポイントラリーシステム

ポイントラリーでは、QRコードに記載されているメールアドレスにメールを送信することで、各通過ポイントを確認でき、通過ポイントの間隔からおおよその歩行距離や消費カロリーを確認できるシステム。

街道アルバム

ポイントラリー参加者が街道中の様々な風景や名勝などを携帯電話のカメラで撮影して送信すると、参加者の提供のあった画像を確認できるシステム。ポイントラリー参加者の連携を目的としたコンテンツとして用意し、活用できるよう制作を行った。

2-3-4 “QRコードシールの作成”の実施

QRコードシールデザイン

ケータイ・街道ナビゲーションの実施にあたり、QRコードシールを作成し、各街道沿いにQRコードの入ったシールを貼り付けた。

QRコードシールの設置箇所は、大阪府を中心に各自治体と協議の上で、決定を行った。QRコードの設置箇所は以下の通り。

竹ノ内街道QRコード設置箇所（28箇所）

軽里北交差点, 日本武尊陵前, 鉄古市駅西側, 臥龍橋右岸, であいの道, 近鉄駒ヶ谷駅, 上ノ太子駅, 松本橋, にごり池, 新池, 六枚橋, 温泉のぼり口, 飛鳥橋, 道の駅, 長尾神社周辺, 磐城駅周辺, 榎元町, 榎元町, 向陵西町, 黒土町, 長曽根町, 金岡町, 金岡町, 金岡町, 金岡町, 石原町, 野遠町, 松原南図書館前

竹ノ内街道QRコード設置箇所（4箇所）

信達王子, 真如寺, うまやど王子, 海会寺跡

シールの設置に関しては、シールを貼る場所を事前に検討し、箇所に合わせたサイズのQRコードシールを貼り付けた。

2-4 これからの取り組み

地域連携について

- ・「近畿の歴史を活かした交流拠点ネットワーク推進事業」協議会の継続を図る。府県の代表者による定期的な交流。
- ・府県の枠を越えたテーマ性のある観光ルートづくり。
- ・街道に続き、「近畿全体の交流」のテーマとなるものを発掘する。

街道整備について

- ・街道沿いにサインや案内板を設置し、街道とわかる道づくりする。府県境を越えて街道ごとにイメージを統一する。
- ・街道沿いにポケットパーク、休憩スペース、たまりなどを設置し、歩きたくなる街道づくりをする。

地域住民の意識の高揚について

- ・地域住民自らが日常的に使っている道がれき死ある街道であることを認識し、「街道を育て、守る」という意識を持つ。
- ・もてなしの心をもって、地域全体で街道を盛り上げる。
- ・歴史をテーマとしたイベントなどを企画、参加する。
- ・ボランティアサポートシステムをはじめ街道の整備事業への参加。

広報

- ・「近畿の歴史を活かした交流拠点ネットワーク推進事業」協議会のホームページを作成
- ・「近畿の歴史を活かした交流拠点ネットワーク推進事業」協議会の広報誌を作成
- ・海外への広報

他街道を使った地域連携の促進

近畿の街道・・・奈良街道、高野山街道、山の辺の道、北国街道など

- ・ウォークイベントの実施。
- ・ウォーキングパンフレットの作成。
- ・ホームページの作成。
- ・街道沿いのサインの設置、道路整備。

平成17年度地域連携支援ソフト事業
近畿の街道を活かした“交流拠点”ネットワーク推進事業
～ウォーキング・IT・歴史文化～ 報告書

国土交通省国土計画局参事官 TEL 03-5253-8369
受託機関:(株)コミュニカ TEL 06-6384-3221